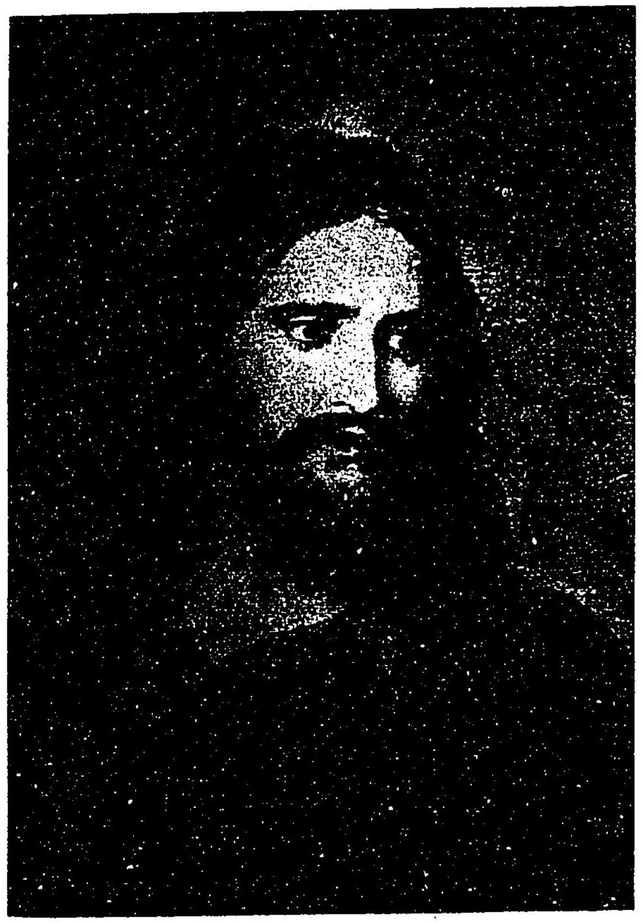
324
151

牧師 イー、エス、バローウェー氏原著

生命

「我は……生命なり」



324-151

余が艱難と奮鬪せる當時の
大なる恩誼を感謝せんが爲に

マルナン、ヘンリー、スミッス氏に呈す

明治
43 9 15
内交

出版に就て

此小冊子に輯集せる余の演説に對し從來稱讃の辭を贈られたる人多し、今此れを公にせば或は其他の人々に對し人生の諸問題に關する解決の一助たる事もあらん、且つ嘗て愛の招致を感知せざる者と雖ども「人類光明の本源なる生命」を有し給ふ神を認むるに至らんかとの希望を起せるに依り此企ある所以なり。

一千九百四年六月

紐育市西第三十三街

バプテスト教會内にて

はしがき

余は幾度びか此書を讀んで「人生の諸問題に關し」大なる利益を得たる「他の人々」の一人なる事を衷心より告白す、特に近時嫉妬深く邪險なる人生に處して余が生命は碎けたりと思意せる事も一再に止まらず、爾かも常に勇氣を取り留め聊か向上の精神を鼓するを得し

は此書與て大に力あり、此れ譯者や著者に深謝する所以にして又廣く余と境遇を同くする他の幾多の人々に光明を與へんとの微意を表白するに至れるも此感謝の發表に外ならず。

余が一家を成せるより既に十星霜を經たるに、給はる所の神恩極めて優かに且つ二男三女幸に頑强なり、何を以て此の廣大なる神の恩惠を謝すべき、此れ余が世間英語を全く解せざる人々のために原著者を紹介するの勞を取りたる理由の第二なり、若し幾多の同情と共に此原書を余に贈與せられたるブゼル孃に對しては滿腔の謝意を表す。

明治四十二年三月

仙臺市中島丁

尙綱女學校內　譯者

目次

◎生命……此れ何物ぞ……一頁
◎碎けたる生命……二〇頁
◎滿ち足れる生命……三九頁
◎裕かなる生命……五八頁
◎勝利の生命……七八頁
◎永遠の生命……九六頁

生命

爾曹の生命は何ぞや

此れ何物ぞ

(雅各書四章十四節)

是れ神の人類に課する質議なり、而して神先つ此れに一の解答を與へて言ひ給はく「暫く現はれて遂に消ゆる霧なり」と此に依りて生命の如何に頼むべからざるか人生の如何に不確實のものなるかを示し給ふ。

人皆此れを知る、爾かも敢て知らざるものゝ如くにして生息す四圍の人は皆辭し去るも已れは獨り永遠に此世に存在すと思ふものゝ如し、然りと雖ども世に人生は束の間ありといふより更に確實なる例征あるべきはず、最長を以て算するも人生は其時期の極めて短かきを以て顧むる、時の短き人に依りて異あるべし、吾人

は明日を期す可からず、吾人の歳月は神の掌中にあり、而して冒頭に擧げたる聖句は神の經綸中人生の定まりおきと人類の神に對する絶對的從屬の關係とを考慮せられたることを吾人に示す一警句たるなり。

世に生命てふ問題ほど興味あるはなし、生命は神に發して神お究極す、生命、此れ惠優かなる神の獨り賦與し得る所なり、生命、此れ各人に解答をあさしめんかたえに神の與へ給へる問題なり、生命、此れ善と惡との源泉にして詛と恩惠此れより流れ出つるあり、生命、此れ搖籃より墳墓に至る束の間にして不測の際涯に起り來りて神の永遠無窮に轉々流れ去るものなり。

爾曹の生命は何ぞや、各人をして此れに答へしめよ、而て其答ふる處に據り或は失敗を生じ或は勝利を得べし、今や思を回らして人生の行程を見る時は吾人試みに天父よりの此大問題に答へて

他日主の臺前に立ち神の賜へる生命を返上し奉るの日、神吾人の行路を賞讃し給ふて「汝の爲せる所良し」との回答に接せんかな。

第一に生命は天與の賜物なるのみならずして、吾人の處分に委せられたる神聖なる信托物なりと思はざる可からず。

人生には快樂と苦痛の伴ふ事あらん、去れど此れ生命の終極に非ず、言はずや「人世は快樂に非ず又苦痛に非ずして重大なる職分なり之が責に任じ、名譽を以て終局するは抑も吾人の本分なり」と而して神吾人をして此聖務を完全に認識せしめんとし給ふ。

天父の授け給ふ歳月は吾人の進展す可き貴き財寶なり、而して生命の長短を決する歳月の數に依るに非ずして寧ろ吾人の之れを使用する方法に依るものあり、神の約束に之あり「我爾曹を永き生命に飽かしめん」と、去れど吾人々單に生存するの事實は人生の眞意を表彰するに非らざる所以を知れり。

生命は世に生息する年數に依らず吾人の人格吾人の行爲に依りて決せらる。

「歳月にあるに非ず、吾人と行爲の中に生く、
間斷なき呼吸に非らずして
深遠なる思索の中に生く、
時辰儀上の數字は如何にあるも
吾人は靈妙なる感情の中に生く、
吉凶に對する哀心の情操をは、時を計るの
資に供す可きなり、最も長齢の人とは
最も多く考へ最も貴く感じ
最も良き行をなせる者なり」

と宜あるかな。

生命は一場の夢に非ず、倚樂園にてもなく、景品を爭ふ競技場に

も非ず、或人は斯く觀察せり、然りと雖ども生命は大且つ聖なる信托物なり、若し斯くの如きの見を有し、神を恐れ敬みて此信托物を處理せんか、終局の得る處必ずや勝利の一あるのみ、然らは即ち前世紀に於ける歐洲の一政治家か其の末期に於て叫びたる如き嘆聲なかるべきなり、曰く「人世三期を劃す、夢の幻時、苦悶の壯年、痛恨の老年」と、去れど吾人は此れに異なり、神の寶座より直射し來る光明を浴びて「青年」は希望の曙光、壯年は赫々たる効積全盛の時、而して老年は事業効を奏せる人生の榮ある日没なり」と言はんとす。

若し生命を一の信托物なりと解せんか、吾人も自己を顧みることを止めて眼は直に衆生に向ふに至らん、因人の呻吟、弱者の苦鬪、疲れたる者の嘆聲、絶望せる者の煩悶等凡て此れ吾人衷心の同情を喚起するに足り、思を凝らして如何にせは我資産を難める者に提供して援助するを得べきかを知り、始めて神より賜はりし我持

物を貧しき者に分與するに至らん、何んとあれは他人の渇望する事物に充溢する者にして恣に之れを藏し、自已以外に用ふる事をせざんか眩ゆき黄金の大愧を秘藏する者吝嗇の徒に若かざる人非人あれはあり。

生命は信托物、然り聖且つ大ある信托物あり、神吾人に命ドて此れを保管せしめ給ふ、此心を體して之れを行使せんか必ずや生命は其長さ廣さ深さに於て増加すべきあり且つ日毎に層一層光輝を増すに至らん。

然れども若し此の大信托物を正當に處理せんと欲せは生命の標準は常に之を神に求め神との調和を欠くべからず、万一我等キリスト、イエスに顯はれたる神の完全ある高平面より遠さかること あらんか、生命の聖ある信托物たることを忘れ、單に之れを祭日の如く考ふる危險に陷り果ては日常煩鎖の裡に忙殺せられ了ら

んのみ、人生酸の酸たるもの神や高き目的を以て創造し、其中に大なる有用の可能性を賦與せる吾人人類が單に鎖々たる虚しき俗事に葬らるゝより甚しきはあし物質的にして世俗的ある快樂の渇仰者よ、被等は神の高き要求を無視し、生命の貴き目的を閑却し而して人類の威信を失墜する下等の水平面に生息す。

ウオーターロー大戰の後、聯合軍のパリに侵入するや、折しも或る大劇場に集へる觀者は舗石道に於ける砲車の音轟しく觀劇の樂を妨ぐるを以て門戸の閉鎖を主張せりこれふ、何等の痴戯ぞ、已のか國家は顚覆し、崇拜せる皇帝は縲紲の辱を蒙り、榮華の夢は消して跡あく、其權勢は俄然地に墜ちたるあ、空しき快樂の渇仰者は已のか國家の滅亡を眼前に控へて尚は自已の情感の樂を一時求めんとするの外更に貴き願望を抱かざりしあり、生命を更に重大視し、之れを大且つ聖ある信托物と思意するの念慮あき人の子の

末路實に憐むべき哉。

再ひ「爾曹の生命は何ぞや」と上帝の質議に對して吾人も生命は一の學舍あり。神は此れか教師にして、吾人の知らざるべからざる各種の經驗は夫か教課なりと答へんとす、若し此の教課を修了するを得んか吾人は眞に多幸なるべし。

我等の召されて生徒たるべき此絶代の學舍に於ては學得すべき極めて困難なる諸種の教課あり、而して吾人か彼の蓋世の大教師の教誡に反應する時始めて眞理の秘義は吾人の前に披瀝せらるべきなり。

神か人生てふ學校に於て我等に教へんとし給ふ第一の教課は神を離れては人類の全く不完全なるものなるなと此なり、此れぞ吾人の學ばさるべからざる第一の難題なり、何となれば人類の倨傲なる自已は凡ての困難に打ち勝ち、在らゆる敵を滅ぼす勇氣を

有するものなりと思意し易ければなり。

去れと神は苟くも罪を愛するの念を斷ち、事實犯罪より免れんと欲するの士には神祐の必要なることを教へ給ふ、諸子は既に此教課を悟得せしや、諸子の最大の要求は神にあり、品性の基礎を固く且つ深く神性中に奠めざるべからざるの理を會得せしや、學ぶべき第一の難題とは此れなり、主よ願ふは更生せる人格の眞の喜を味ひたるなとなき者と、生命の源泉に汲みたるなとなき者とに懇ろに教示せられんなとなり。

第一の難題を學ひ了りたる後、人生の學校に於て神の教へんとし給ふ第二の教課は今より後、世を終るまでの經驗に於て事毎に神に堅き信頼と信仰とを有する必要ある事此れなり。

神は惠深く慈悲と同情とに富み給ふ事を我等に表はし給ふ、而して吾人の信頼を求め給ふ、過去の生涯を追想せよ、我等幾度か

疑惑と恐怖とに遭遇せしあとなかりしや、去れど雲晴れ旭日美と
しく照り渡りて神の温顔の輝くを見たり、今後起らんとする凡て
の事物に於けるも決して此れに異なるものに非ず、神の目的は何
ぞ、其不變なるあとく、キリスト、イエスに於て平和の中に我等を光
明に導き給ふにあることを吾人に顯はさんとするに在り、吾人眞
に人生を一の學校と思意せんか此生命あるものは目的に非すし
て單に目的に達する手段方法なるあと、完全態に非すして更に高
貴にして優等なる境涯に到るべき準備に過ぎざるあとと、其來世
に於ける生存の時期は地上の現生命の時日より無限大のものな
ることを知るに至るべし。

次に本文の質議に對し吾人は答へて生命は一の機會ありと言
はんとす、故人を追想する毎に彼等は在らゆる貴き機會を握り得
たり、最早此世に殘れる好機なるものあるあとあしと思ふて之れ

を羨むあとあり、去れど何れの日か各人や貴き報償を收穫し得べ
き豐富なる機會に遭遇せざるべきぞ、問ふ勿れ機會は何處に横は
るやと、目を擧げて視よ、門戸は眼前に開けて、吾人を招ぐに非すや
或年の事ありき二隻の船のアマゾン河に出現せるあり、一は災
厄の信號旗を高く翻し、一は此れを救助せんためありき、救助船中
より災厄の原因如何を問たるに聲も苦しげに答へぬ「水を與よ、渴
して將に死せんとす」と、姉妹船よりの答は斯くの如し「水桶を投せ
よ、飲料水は其周圍にあるに非をや」と、氣附かざりしこそ是非なけ
れ、彼等は今や鹹水大海を離れて川口より遠く遡り居りければ周
圍と遠き山々の永遠の雪を載き清澄にして美はしき泉を有する
嶺より流れ來れる最も清き美はしき水にてありしあり、清水は流
れ來りて彼等を圍繞せるに此れに氣附かざりしなり、此の如く現
に好機は吾人の周圍を繞りあるに我等之を知らざるあり、過去の

同胞が有せし好機をのみ羨む勿れ、現在を利用し進んで開かれた
る戸より入りて至高至福の境遇を求めよ。

世に大業を完成するに今日より好機あるとなし、何ごとあれは所謂最大事業あるものは貧因と罪悪との裡にありて尚は潔く眞實の生涯を送ること、疑惑と擾亂との包圍に陷りて尚は勝利ある生涯を送ること失望の淵に臨みて強健なる勇氣も施すに由なく將に倒れんとする時尚眞實あることあれはあり、此れ實に最も大なる事業あり、而して斯かる事業に生涯を委するの必要ある時機は蓋し今日の如く我等に近きあらんや、キリストの爲めに身命を犧牲に供するの日は或は既に去りたらんも、キリストのために生くるの日は常に我等の中にあり、而して今や吾人が最大の勇氣を奮ひ起さす可きに會す、換言すれは最高最善の生命は現代人生の行旅に於て始めて其試錬を味ふを得べきあり、最も眞實なる勇

氣を試みるは今の時にあり、何ごとなれど神は各人に自已を最も多く實益に供すべきことを求め給へはあり、神の吾人を鍛錬せんとし給ふ試錬は中にある至高至貴のものを發輝せんかためあり、諸子の好機は決して今日より大なることあたはす、若し人最上を求めんか、神は此れかだめに最も貴き生命を與へて其求めに應し給はん此の一の目標こそ各人の前に在り、而して義務の最も高き考慮は吾人を勵まし在らゆる妨害に抗して此目的地に突進せしむるものあり。

日常の生活に起る平凡ある事件中吾人の最大最良を提供すべしと見ゆるもの絶なてあることあし、何ごとなれは吾人活動の範圍は極めて制限せられ最も貴き勤勞も人の視線を惹くあとなく、爾かも世の稱賛を受けんとするは各人の情なるに、何事ぞ吾人は往々にして之れを與ふる事を屑しとせざれはあり、千万人の稱賛を

買ふに足る如き事業の行はるゝや吾人亦忽ち英雄の班に入るを得可きを思ふ、去れど苟くも高貴なる行爲なくんか、生ける全能者の前に顯はれざるあとなし、而して若し終りまで潔く眞實あるを得んか、吾人は其機會の容量を完全に充すものといふべく「雲の如く」「聞む物見人」の稱揚を受け聖なる神の讃詞に與るを得べし。

第二の機會は服役に對する招致にあり、而して此事たる今日より急務なるはあし、何ごあれは人類の多き嘗て今日の如きことなかりけれはなり、且つや地上幾千万の民は嘗て人生の眞義を悟り永遠の神に依りて暗示せられし機會の門戸に入りにし人々の遭遇せる人生の深甚なる要求を感知するあと更に切なり。

世の人類の幸福安寧を來くせんかために務むべき機會より偉大なるものあるこなし、斯かる奉仕は神の極めて喜び給ふ所なり、此れぞ主の在らゆる精力を傾注し給へるものなり、夫は主在世

れ日に言ひ給けるは「晝の間は我必を我を遣はしし者の行をなすべきなり夜來くん其時誰も行をなすあと能はに」と、而して靈示を蒙りたる福音記者は此神人の生命れ眞情を一括せんとして「ナザレのイエス世を周りて善を爲し行けり」とれ驚くべき字句を用ひたり、實に吾人の覺悟によりて生命は一の機會とは成るあり。

奸惡なる勢力も絶ゆれ逞しき働を以て人類の汚毒と腐敗とを來さんとす、此惡れ勢力を屈服ずべき唯一の方法は人類の幸福に向つて全精全心全力を盡して働くにあり、已れを忘れて衆生に仕へよ、後始めて最大の好機は神に忠信眞實にして人類を神に導かんうためにに全力を盡すにあるあとを知るに至るべし。

「罪働かは　我亦働かん、
罪毀つこも　我は建てん、
罪と戰ひ　我業を勵み、

やがては永遠の安息に入らん。
時働かは　我亦働かん、
時毀つとも　我は建てん。
罪と戰ひ　我業を勵み、
やがては永遠の安息に入らん。
死働かは　我亦働かん、
死毀つとも　我は建てん、
罪と戰ひ　我業を勵み、
やがては永遠の安息に入らん。

而して今や吾人の生命は天父の所謂「漸く顯はれて遂に消ゆる霧なり」とせんか生命は一時のものにして變り易きものなり、吾人の生命を表明する此句より完全なるものありや、如何なる日にもわれ吾人は或る生命か地上の行程を終へたりとの報告に接せざ

るあとなきに非ずや、今日大なる財寶を自由し明日は去りて跡を止めざるに至る比々皆然り「暫く顯はれて遂に消ゆる霧なり」といふ抑も故ある哉。

ザーキシーズ王三百万の大軍を帥ひて立てる時――斯かる大軍は有史以來一將の統帥せる大なるものなり――彼は心中溢るゝ斗りの誇に充てるかと思の外涙にむせびぬ、何故に落涙し給ふかと問へる者に向て「夫は兩三年あらずして此の目に餘る大軍は凡て死し去る可けれはなり」と、答へたりとぞ、嗚呼人よ、實に汝は霧の如くあるよ。

人如何に偉大と榮光の極に達したりとて夫は人生の本質を變ずるものに非ず、實に吾人は華麗なる墓碑と莊嚴ある紀念像とを見たり、去れど此れ唯人生の孱弱に一層明白なる對照を呈するに過ぎざりき、而して此等のものは凡ての勳功を罵詈するもの〻如

し。

余は知る、人は往々にして――已れは他人の境遇に例外をなすものありと思意し易を、此れ特に世の稱揚を受くる人に於て然り去れど彼等亦此世に永久生存するものに非ざるに想到するを得ん、吾人の望み消ゆ果て、友は滅び、氣力は衰へ、而して吾人若し止まりて最大の名譽と富と權力とを有せる人も最も平凡なる民と同一の鑄型を通過して万人の拂はざるべからざる負債を自然に拂ふべきものあるあとに思ひ當らば羨望も自負心も瞬く間に消失し去らざらんや、諸子は身に横溢の元氣を有するや――勢力權威長命の期待を有するや、さもあらばあれ、夫は最も長く算するも極めて短期のものにして遂に消ゆ去るものあるあとを記せよ。

或る羅馬の勇士が戰爭に勝ち、前には勝利品を羅列し周圍には凱旋の將卒を從へ、狂熱せる市民の天地動せん斗りの歡呼の裡に

清掃せる衢路を進める時、戰勝の榮を荷へる鹵簿に同乘して背後に立ちし一囚奴は金冠を頭上に高く捧げて數分毎に「記せよ汝も亦人なるものを」と小聲に言ふことを命ぜられにき、故に吾人は諸子の運命諸子の前途の希望は如何にもあれ、生命は其の脆弱性によりて著はるゝを記臆せられん事を望む「夫は直に消ゆ失するもの」あれはあり。

然らば神が人類の生命の脆弱あるを指摘して教へんとし給ふあとは何ぞや、直ち消ゆ失する霧の如しとは如何なる意なりや、神の意は蓋し永遠に堪ふるものに我等を結合し且つ神の我等に與ふる各般の援助は永續すべき生命に吾人を導かんとの目的にあり、何となれば「神の旨を爲す者は永遠に生くるを得」べけれ也

生命！神此れを與へ給ふ、此れは消ゆ失する霧の如く且つ脆弱あるものあり、去れど神は變り易きものを永續し絶ゆて滅ぶるこ

となきものたらしむる可能性を吾人に賦與せり、而して吾人の生命は脆く弱く憐むべきものなれども神の手一度び觸るれば此れを永久不變のものとなすことを得。

夏の日の夕陽將に沒せんとする金色を浴びてカモニーの谷に立ち仰てモンブランの高山を見んとする時、雲、山を蔽ひ、視線を遮りたる濃霧のために豫期の光景に飽くを得ず、去れと翌朝に至り雲晴れたる時、莊嚴雄大なる高峯は永遠の雪を載き屹然として旭日に映ずるを見ん、此時に當りてや前日の雲を思ひ、其去りし跡を追想するに吾人は再び「見ゆるものは一時あれども見ゆざるものは限りなけれとあり」この神の聲に接するの心地す

碎けたる生命

「其泥を以て造れる所の器、陶人の手の中に傷れたれを彼其心の

儘に之を以て別の器を造れり」

(耶利米亞十八章四節)

人エレミヤを呼んで哀めける豫言者といふ、彼れ常にイスラエル人が神に背き其訓誡を棄てたるの悲を表明しけれはなり、彼は其民の殺されたる者の爲に晝夜哭かんとて已のが首を水となし其目を涙の泉となさん事を願ひけり、彼は其民を敎へ彼等と論じて神より離れたるの故を以て受くべき恐るべき結果を示せり、去れど彼等は依然禍の途を歩み其目に神の慈悲を見ず、其耳に神のやさしき切なる求めを聞かざりき、しかも神の民に對する至大の愛と天父に對する已が變らざる忠信とは民が永遠に神より離れ去らんとするを思へる時、彼の心を破る斗りありき、而して今や彼は絶望の淵に立てり、彼は民を見限りたり、夫は民が再び神の愛に回復すべき一縷の望を繫ぐこと能はざる程に遠く神より離れ去れ

るを知りければなり。

恰も此時、預言者が氣を喪へる心地せる時なりき、神は彼れに顯はれて其測るべからざる愛を敎へ給へり、彼の預言者が知らざるべからざる敎訓を示さんために神は彼を陶工の屋に導き轆轤を用ひ泥土を以て種々の有用なる器具を造るを見せしめ給へり、彼れの見る間に陶工は泥土を鑄型に入れ次て之れを轆轤に上げて廻せば徐々に完成に近づく、車輪の廻轉するや次第に不齊を整ひ器は愈々成就せんとす、然るに其將に完成せんとせる矢先きに柔き泥土の中に一片の硅石の混せるありて殆んど完成せりと思へるものを瞬く間に破りて不恰好なる土塊となし此迄の骨折を全く水泡に歸せしめたり（エレミヤ）思ひらく陶工は此碎けたる土塊を棄て、更に他の泥土を以て新しき器を造るあらんと、然るに驚くべし陶工は碎片を集め災厄の原因を排除して再び之を型に入れぬ、次に轆轤にかけ遂に之を完成せり、しかもエレミヤが到底用をなさぬと思意せる材料によりてあり、彼此業を見終りしや神は始めて其敎へんとし給へる敎課を示し給へり、神の民は此泥土に比すべく、神は聖なる陶工なり、而して假りに民の生命は碎け傷き破れたりとするも尙神の手に委せんか神は更に此れを改造し得るの理を敎へ給へり。

生命は幾多の傷き破れ碎けたる範例を示す、中あは世の與へ得る在らゆるものを得て平和に且つ幸福あるを得たるあり、世の群りて羨望せる生命にして、しかも終世苦難をのみ嘗めたる者あり（バイロン）公の如き一時全歐洲の寵兒として世の快樂を凡て有し且つ世の稱贊と名譽とを一身に集め且つ在ゆる快樂の盃を盡し在らゆる嚴しき令聞を耳にし早く飲み深く飲み幾百萬の有衆が渴を醫するに足るほど飲みて後最早飲むべきものあきの故を以

て渇して死し」たる如き生命も此あり。

彼バイロンは全世界の羨む所となり、其才幹は無比の光輝を放ちたるに夫は唯彼れを罪悪に對して一層有力ならしむるのみなりき、彼れが有せる天賦の才能斯の如く、彼が受けたる阿媚斯の如く耳に響ける稱賛の聲斯の如く、眼前に展開せられたる實用の可能性斯くの如くにして、若し神に遠かり物慾の生涯に戀着することにより心情の渇望を滿足せしむるあとを得たらんには臨終の彼の唇より必ずや二十五年間の辛苦艱難を經驗し來り目前に殉教者の死を控へたる者の唇より出でたる「我は善き戰を戰ひ、走るべき道程を走り信仰を保てり」の如き勝利の言を聽くべかりしあらん去れど彼の光輝赫々たる青年より此語を聽くを得んや臨終の彼の言は人をして立て其跡を追はんとの念を生せしむる底のものなりしや、否、否、三十六の浦若き彼が末期に吾人に告げたる痛

恨乃跡如何に若かりしよ、曰く

「我一生は一個の枯葉に過ぎず、
花去り愛の果も亦あるあとなし、
痛恨や壞爛や悲哀は獨り我のなり、
我胸に燃ゆる熱き火は
寂しき火山島の其れとも似たり、
今はさて松火とも
友もあく、
燃ゆ盛かる茶毘の炎のあと。
去ても世人屢々賛辭を呈せし後哀悼を禁ぜざりし碎けたる生命を如何にせんや。

人ありロード、ダンダスを訪ひ新年の祝賀を述べけるに彼は此れに答へて「昨年以上の祝賀を受けざるべからず、夫は昨年に於て幸福ある一日をも有せざりければなり」と。

國民の羨望する所となり英國法廷の首班に列せる人の言へるあることあり「數旬ならずして我は世の煩累を去るを得ん、爾かも其行く先きは冷かなる墳墓なるのみ」と。

天才美術家スコットの最後の作をかせりといふささやかなる書齋に書き出されたるは Nepenthe (鎭痛劑)即ち健忘かる語なりき。

ナポレオンの孤島に幽囚せられし一日言へる事あり曰く「余が愛する者、余に屬する凡ての物は碎かる、天は人と共力して我を難ます」と、而して彼は臨終に嘆聲を發して「嗚呼禍なる哉」と言へり。

ヴォルテーアは人世を一括して Ennui 即ち嫌惡の一語を殘せり、吾人若し暴風雨の止みし後海濱に出つれば嘗て威風堂々大海を航行せる多數の船舶の難破せるを見ん、此れと同じく道德界の海岸に於ても嘗て人類の賛嘆を博せる幾多の碎けたる生命の遺骸を見るなり、悲むべき光景の中碎けて如何ともすべからざるに至

れる生命ほど悲むべきはなし、王國の滅亡も人生の敗亡を含有せずんばさして悲むに足らず、而して世には帝國の顚覆を悲むより も更に小なる一生命の喪失を悲む大かる人格の多く存在する所を見ん

ダビデにありて然り、彼れが跣足のまゝ、顏を涙に汚し、カンヲンの山を攀登れる當時を思へ、彼の心の傷きて出血せるは何の故ぞ、王位は動搖を來し、王國は分裂し、身は逃亡者にして、其軍は滅亡を以て脅かされたるが故なりしや、否、然らず、此等は彼の悲哀の主因にあらずして其子アブサロムの罪惡にあらずや、彼れの碎けたる生命の故に非ずや、戰機一轉して王軍優勝の運に移るや、王は已れの故を以て如何に青年アブサロムを寛待すべきを部下に警告せるかは人の能く知る所あり、而して遂に其子の訃音に接するに及びてや、此薄命ある父王の衷心より出で來れる哀句を見よ「我子アブ

サロムよ、我子、我子アブサロムよ、嗚呼我汝に代りて死にたゝんものを、アブサロム、我子よ、我子よ」と。

我再び言はん、悲むべき光景の最なるものは、破れ碎け傷きたる生命なり、罪惡は一の暴君なり而して其配下に來るは、刻々緊縮する鎖に導かれ愈々深く暗き牢獄に導かるゝものなることを知らざる可からず。

諸子は神の配下に屬するやキリストの羈絆に屬するに至らば最早破られ碎かれたる生命を有するものに非ずして必ずや最善最眞の自由を見出すことを得るあり、救世主の冕冠に鉗入せる寶石の如く輝くに至るべく、言ふべからざる苦言が貴き稱賛の語に變せられたるものに外あらず、而して生命が嫌惡堪ゆべからざる底のものと表はれ又若し犯則及懈怠の罪が、共に諸子を非道に陷るゝことも比類あき神の力を思へ、記せよ最も深き汚れたる罪人も

罪と不淨のために開かるゝ源泉に就きて潔めを受くべきあることを」。

キリスト教を厭惡せるの甚しきパウロのごとき、神と濟すれ甚しきジヤン、バンヤンの如き、淫行度なきマグダラのマリヤの如き汚壞の極に陷れるジエレー、マコーレーの如きイエス、キリストに依りて凡ての罪の宥免を得たると記憶せよ、ペテロを救ひし神は汝をも救はん、バンヤンを潔めし寶血は汝を雪よりも白くせんマコーレーを招致せる聲は依然汝の頑迷なる心に微妙ある調子もて「我子よ汝の心を我に與へよ」と懇求し給ふ、慘たる過去を追回して已のが凡てを榮光の君キリストの足下に來らせよ、碎けたる生命が破れ果てゝ回復の望みを失ひ「収穫は終りぬ、夏は過ぎぬ、而して我生命は救はれず終りぬ」と言ふに至らん。

我之れを言ふは必ずしも嘗て心を神に委ねたるあることあき頑迷の徒に向てのみにあらず、何んとおれは世には嘗てイエスの十字

架を承認し、救世主に對する愛を表白せる人にして現に神と交りを經續して生活せざる人あれはなり、諸子は神の招ぎを受けたり、吾は神と和解するを得ん」と言へり、而して其の言の如くせり、去れど哀れむべし今や此誓約を果さざるなり。

諸子の平和を滅却せるものは何ぞ、現に已のゆ生涯を顧みて不滿を感ずるは何ぞや、吾其理を示さん、夫は神と和解を缺くが故あり、從たる原因、――事情は多くあらん、諸子が平和を奪ひたる細目の科條は之を述ふるあたはずと雖ども其主因は明かに之を指摘するを得、即ち從來の或行動に於て神に反抗せること此あり。

若し絶らず「御旨をあさせ給へ」と言ひたらんも夫は口に於ての為心より、に非ずして密には「我願をあさしめ給へ」と言へるあらん吾人は確的に指摘するあたはず、夫は神と諸子との知る所あり、唯吾人は明かに何處かに故障ありて夫が己れの暗雲の原因あるに

相違あしと言ふに躊躇せず、此れぞ諸子の生命が聖ある神に逆ふことによりて傷けられたる理由あるあり、或は思ふに罪を犯したる事あらん、我は神の命じたる務に服するを拒みたることもやあらん、然からざれば此れを言ひ逃れんと欲し已れの無能力或は何物かと口實として神乃意思に逆ふに至りしことあらん、諸子が愛の冷へ始めたるを感し、諸子の熱心最早内に燃らざるに至り、而して諸子の生涯は最早成効に遠かりし時あるを何處にか自覺せるあとおきや、禍なる哉、爾來生命は碎けに碎けたり、内に爾曹を喜ばするものあるあとなし、此れ皆神に反抗せる結果あるのみ、恰かもエレミヤが見たる轆轤上の泥土に一片の硅石のあるありて車輪に觸れ粉碎せられし如く人は神の手中にある泥土の如く而して神は人を鑄て美性を發輝せんとせり、諸子を最も愛せし者は諸子がキリストの模型に接近せるを見て喜び天使は樂み而して諸子の

靈はイエス、キリスト、の交際に於てのみ見出すを得べき恩惠の境遇に躍り入れり。

然るに彼の日汝が神の聖意に逆ひたる苦き記臆の日よ、平和は我が心靈を去り、天使は其光景を見て悲み、而して最上の友は嘆せり、嘗て鶯の翼に乘りて翔りたるものか、其飛行を止め、今や其翼を收めて低地の卑濕陰瘴れ塲所に下りたるあり、彼等は亦諸子をシヤロンれ紅薔薇を棄てゝ暗黑の死乃蔭に移り燦然たる靈水を去りて俗世の野心と快樂とに汚れたる濁流を求めたるあり、此際に於ける諸子の感想如何、必ずや美はしき樂しき感想に非りしならん、諸子の碎けたる生命を見て須臾も滿足せざりしあるべし、然り、吾人思ひらく諸子は過きにし生命を見て浩嘆せるあらん、而して絶望の墳墓を徜徉して時に彼所に記されたる碑銘を讀みしとか、曰く「キリストの理想の到達せんと期せる記臆は貴き哉、此希

望を有せる間は余をして幸福勝利の人たらしめたり、一旦神意に逆ひしや俄然死せり」と、既にして又行き目を觸るゝ一の墓ありて記されたる墓銘は此の如し「神に奉仕せる記臆は貴き哉、此れに從へる間は神の奉仕に用ゐらるゝあとの恩惠を日々目擊せり、而して疑惑の我目を暗ますなし、一度ひ神を斥けしや一朝にして死せりと更に進むに從ひ已のが「眠れる希望」の墓地に一の新しき碑あり、枯れ凋めゝ生花は上に横はり目に映ずる碑銘を見るに「我が平和なる心靈の記臆は貴き哉、外部に爭鬪あるも此平和を有せし間は中心は凡て平穩なりき、神の意に反して滅びたるは自業自得なり」と然るに見よ、鋤を手にして芝生を堀る人蔭あり、新しき墓を準備するあり、之に葬られん者は誰なるべき、吾人は人を滅す者が發堀の終るを待ちて立ちたるを見る、而して黄泉の旅に上る者あるを期待して先つ其墓銘を備へ置くあり、斯かる墓銘を建つるあと

を神禁じ給へ「永遠の生命を期待せる日の記臆は貴き哉、而るに神の旨に背反せしや、此希望も薄らぎぬ、しかも頑として不從順の行動を止めざりしを以て遂に滅びたり」と此碑を建てざるべからざるか此墓滿されざるべからざるか、寧ろ他の墳墓をして葬り去りたる諸子の希望を再び喚起せしめ一度失ひし恩惠を回復せられん事を欲せざるや、此等佳年の希望の墓側に立つとき諸子にして此希望を追求するの念を有するならんか、吾人は甦生の多幸なる証明を呈するを得、而して此れぞ在らゆる熟慮を要する尤も緊要なる問案に導くべし、何ぞや、如何にして此事あるや、如何にして過去の希望を回復し得るや、如何にせば再び神の惠を受くべきや、如何にせは神碎けたる生命を認めて之れを改造するを得るやの問案此れあり。

博士マイヤーは織臺に坐せる織工を假り來りて人類や天父と

の交際に入れらるべき例を美はしく説明せり、暫くは何等の故障あくして織り居たりしか遂に支障を發見せり、見よ一條の糸は切れてありき、能ふべくんは彼は坐乍ら按排して仕事を經續すべきも夫は不可能あり、下り立ちて切れたる糸を繰り合はするより外あし、斯くして仕事は支障なく遂行せらるべきあり、靈魂よ汝の生命に對するも斯くの如きのみ、人生何處にか糸の切れたるあり若し生命の經緯を組成する糸をして其欲する如くならしめんとせは、先づ返りて其切れたる糸條を見出さざるべからず、泥土を改造するには硅石を除去せざるべからざる如く靈的平和を得、併せてキリストの理想に達する通路をたどらんと欲せば彼の切れたる糸を繰らざるべからず、嗚呼此の切れたる糸とは何ぞや、諸子自から此れを知る、夫は神より離反せる者に對しては和解ならん、罪を犯せる者には賠償あらん義務を怠りし者には奉仕の生涯に就く

こゝあらん、去れど記せよ、諸子の生命は此等不從順の「行爲」により て損傷せられ、懈怠の行爲によりて粉碎せられけんも思を翻し、切れたる糸を修復せば忽ち神の大なる恩惠の道に立ち返り光明爾曹の心靈に滿つるや必せり。

若し夫れ生命の不調和の故により不斷の不平を耳にするとも失はれたる者に與へられたる生命は其最大の目的として完全なる調和の進捗と平和の賦與を有することを忘却すべからず。

古代の神殿と彼の有名なるオールガンとを見んがために多くの旅人がフリボージの古城を訪るるは昔も今に異なるなかりき、老番人は隈なく堂内を案内せる後高機敷に上り有名なるオールガンに就き單調なる數曲を奏す、或日のこと彼れオールガンの室に入りし時一人密かに追從せる者ありしが老人は手慣れたる曲を奏し終ると青年つと進み出でゝ「余も奏し得るや」と問へり

老人は「否とよ、他人の手は之れに觸るゝを許さず、唯大監督と我とのみ奏するの權あり」と「去れど暫く余に奏するを許し給はゞ余は貴下の命に從ふ可く、さすれば何等の故障も候まじ」と、切りに乞ふて止まざるを以て拒むに由なく老人は不承無承に其請を容れ青年はオールガンに坐を占めたり、忽ち音樂は天外より來りしかと疑はるゝ斗り響き渡れり、折しも場内に居合せたる人々は足を止めて嘗て耳にせるとなき此大音樂を傾聽せり、老番人は青年が已が指揮の下にありしあとすらも打ち忘れ夢見る心地にて賞讃を禁じ得ざりしが樂の音止むに至り青年に向て「抑も御身は誰なるぞ」と問ひたるに「我はフェリックス、メンデルソンにて候」と言へり、

他日多くの來觀者の此殿堂に來るや、番人は堂の美を委曲説明しオールガンにつきて物語りし後御身等はメンデルソンの此所にて樂を奏せる日に居給ひたらんには如何に幸なるべかりしよ、

夫は恰も天の戸開けて此古風のオールガンにより豫期せざる好調和音の此下界に注がるゝ如くなりき、何等の痴愚ぞ、音樂の天才をして其精神を此オールガンに傾注するを禁せんとせる余の面目なさよ」と。

兄弟よ、此れ眞に諸子の生命を表明するゐ非ずや、イエス、キリスト諸子の混亂不調の態を目擊せり、彼來りて好調と平和とを來さんとせり、主は長く立ちて汝の心の鍵盤に觸れしめよと汝と押問答せり、然るに諸子は主を拒み人類の穫得し得る最大の惠即ちキリストを心に宿すことを肯せざりき、若し反抗を去りて不調和の境遇にある汝の心に主を來らしめば、平靜と調和は直ちに來るべく諸子の生命には消ゆるはことなき天の和樂の永久に響くものあらん。

滿ち足れる生命

「何故糧にもあらぬものゝ爲めに金を出し、飽くまでを得ざるものゝ爲めに勞するや」

（以賽亞五十五章二節）

「彼は飢たる靈を飽しめ玉へばなり」

（詩篇百七篇九節）

人生の歷史は正に煩悶の夫れなり、不安と不滿足此れ人類の運命ありける、海の浪を見よ、風吹けば逆卷き、平穩なりと見ゆる時も一漲一退ありて寸時も靜止することなし、人類向上の路にあるも斯くの如し、爾かも此は人生特殊の階級のみ適用すべきものに非ずして下は最も卑き勞動者より上は最も高貴の地位にある人に至る迄社會總般の者に適用するを得べし、言はずや「王侯の頭ゐ

も不安は宿る」と此れ最も信ずべき一の箴言にあらずや。

此煩悶の境遇に陷りたる者の中凶器を用ひて我と我身を傷け恐るべき最後を遂けたるもあり、或は其地位を變じて飽くことを得ざるものゝ爲めに空しく勞せんとする者あり、更に或者は賢くも眞の神に復歸し已れの在らゆる要求を滿され心中の動搖は救世主の御聲によりて靜められたり、之れ神は人類が煩悶の浪に漂はさるゝを望み給はざればなり神は人類が靜平の避難所安全の港に來ることを求め給ふ、而して神の約束と警告とは明かに斯かる切望を表明するに非ずや、何んとあれば主は何故に糧にもあらぬものために金を出し飽くことを得ざる者のために勞するやを尋ね給へばあり、其意蓋し吾人が獨力もて靜平を求むるの勞は必ずや失敗に歸するものあるを暗示し給ふあり、人は飽くあとを得ざるものを追求し、勞して之を得るも依然止むべからざる渴を覺へて、「何れの時我飽くことを得んか」と尋ぬべけれはあり、神は切に人生を悲み人の勞力の空しきを知り玉ふ、故に我等に約して其裕かなる生命より飢へたる吾人の生命を飽かしめんとし給ふ。

吾人若し神の人生に對する評價を認め、生命の大要求に應ずる資力なき一時的の事物に神の定め玉ふ價値の極めて小なるに服せんか人類は極めて幸福なるべし、人若し飢渴く如く心靈の慕ふ所のものは生る神に外あらざるあとを信じて、吾人を失望せしむるあとなき源泉に立ち返ることを得は幸あり、此くして始めて不安の狂熱を脫却しキリストとの交通により生命の大難題の解決を見るを得ん。

「何故糧にもあらぬものゝ爲めに金を出し飽くあとを得ざるものゝために勞するや」。

去れど吾人は事實飽く事を得さるべき乎、人の與ふる惠の中、或

は吾人の獲取し得べき賞品の中、完全なる満足を衷心に與ふるものあかゝざらんや、此事たる極めて熱心に然かも誠意を以て討究せられたる問題なり、且つ人類は直に之を肯定せり、何ぞあれは若し然らざらんには何故に全力を集注してソドムの林檎を求むべきぞ去れど此問題に答ふるに當り、人の與ふるものは如何なるものあるやを索究して結局吾人が正義の大道を進むに非るよりは勞する所は飽くことを得ざるもの、爲に空費するものあることを自覺せざるべからず。

現代世人の追求するもの、數ある中其の最なるものは何ぞや。言はゞ財寶あることに明なり、此目標に向て思を廻らし力を盡して遂に人類は「金錢狂」に陷れりと言はるゝに至れり、此れ他にあらず、人類は大なる富を有するによりて滿足を得べしと信ずればあり、果して然らば宜しく公明正大に之れを表明すべし、唯之れを是

認するに先たち大なる財寶を獲取せる者は實に斯かる結果を得たりや否やを考究せざるべからず、人生の經驗は依りて以て吾人の足下を照す燈なり、過去によりて將來を推考するを得るが故に若し大なる富を蓄積するにより、安心と滿足とを得るものとせば現に此れを所有するの事實は將來平和と幸福とを來らすに相違なしと斷定するに於て何等の不都合あることなしと雖とも此れに異なる結果ありとせんか、吾人は決して財寶が滿ち足れる生命に到達する門戸たるあとの確証を有せざるなり。

往昔此市に一人の極めて富裕なる者住めり、彼れは其職とせる實業に於て成効せざることなく、全國の金滿家の隨一と稱せらるゝに至れり、去れど彼亦自然に對する最後の負債を償却せざるべからざるの日は來れり、今や病床に呻吟し唯死を待つ間際とはありぬ。

死に頻せる彼の富者を圍みて最後の訣別を告げんと立ち合ひる友の親しき顔を凝視して彼は「我がために歌ひてよ」と求めたり人は皆逡巡き、聽て一人の歌ふに連れ聲を合せて歌ひ出でたる彼の古き歌、

「我に來れ、憐れにも乏しき罪人よ、弱く傷き病み且つ痛める者よ」

死なん斗りの彼の言へるやう「さあり、夫は我を指して言ひ玉へるあり、我は貧しく且つ乏しき者あり」と。去れど彼れは七千萬弗の富者に非ずや、しかも今や彼は貧しく又乏しく全く飽くことを得ざるものなることを感せり、故に若し斯くも財寶を蓄へて尙且彼を滿足せしむるを得ざりしこせば、全世界をして其足下に跪かしむるも到底彼れを飽かしむべしこは思ふこと能はず、否否、全世界にも優りて大あるものあるに非ずや、此れぞ吾人の靈性あり、何これは其榮華を盡し其偉大を盡しても世界は人心を滿足せしむ

るに充分なりといふべからされはなり、故に吾人の心靈は全世界よりも遙かに大なりといふの不當にあらざるを知らん。

去れど諸子は言はん、所謂富の觀念に於て差異ありと即ち或者は單に之れを蓄積することを求むこ雖も、眞の滿足は富が賦與する能力及富即ち財貨を所有するに依りて來ること、去れと之れ人類經驗の確證する所ありや、人此世の在らゆる財寶を有するも神明の希望を有せざる者に滿足せる者ありや、若し之れあらんか諸子の希望は宜し、去れど若し然らざらんか、諸子は此れと同一地域に探索するも先人の見出せることなきものを發見し得べしこするか。

余嘗て當市中最も華麗莊嚴なる一家を訪れしことあり、人目を引かんために裝飾を施せることこ到らざるはなかりき、驕れる所有主は內外手を盡さざる所なく、全光景は人目を眩ます斗りの美を以て榮華の花を開ける神國の觀ありき、余は主人こ相併ひて暫し佇

み貴下は實に美はしき家を所有し給ふまとよと言へり、去れど彼れ一言の回答もせず、余はすかさず内部の裝飾や夏の夕陽に映せる外部の美を詳述して再び「貴下は實にも美はしき家を所有し給ふことよ」と言ひしに、彼れ悲しげに余を顧みて言ふやう「見ゆる全部が燦爛たる黄金に非るを怨む」と余は從來同樣の宣告を百千度耳にせるも目前斯かる光輝を見、彼が「全部燦爛たる黄金に非るを怨む」と言へるを聞くに及ひて始めて眞意を解するを得たり、余は唯外觀の美を見たり、彼れは内部の虫蝕と腐爛とを知れり、此ある哉、余等は時に鳥の鼓翼をのみ見て其胸に射通されたる矢を見遺すことあり、而して其眞相を見るに至りては此等の外なるものは内なる我を滿足せしむる力おきことを知るに至らん又世界の在ゆる財寶を意のまゝに使用するを得たりとするも依然内心に欠乏を感ずるを止むる能はざるべし、愚なる哉、屢々吾人は此等の虚

榮を求め、在らゆる已ゞ渴望を飽かしむるに足ると思ふことあり と雖とも、一度び獲得すれば怨ち孤獨の境に我を棄て、嘲笑を逞くするまとの如何ゝ怨みなる

數年前遠き西國より當市に來れる一客ありき、彼れは大なる富を有し、無上の大望を抱きて來れるあり、其大望とは紐育の在らゆる富豪を凌駕する廣壯華美なる邸宅を築かんとするにありき、彼は其希望を遂行せり、大望を成就し王者に擬すべき壯美の建物は完成せり、然るに完成の期に至り彼れは突然黄泉の客となれり。

其死骸の最後の安息所に送らるゝゝ先たち一度ひ此の美はしき宮に移し入れられたり、凡て他を凌駕すべき殿堂の裡に生命あき泥塊、碎くる塵とは何ぞ滑稽なる、飽くまとを求むる人に對し何ぞ空しき嘲笑なる、故に富を求む者に向て「何故に汝等飽くまとを得ざるものゝために、勞するや」と尋ぬるは最も事宜に適したる

問案に非ずや、何ぞあれば世の「富の中」に満足を求めたる者にして一人たりとこれを得たる者なければはなり。

幾多の世人は又快樂を求めて満足を得んとせり、歌ふ女神の聲の耳に響く所色慾の追求せらるゝ所、人生の虚飾粉装の見らるゝ所、世人の群集する所、此れぞ我等の満足を買ふに足る所なり、とは多くの人の言ふ所なり、去れど顧みて經驗の燈に就けば、見る所如何あるものぞ、世に浮身をやつして快樂の祭壇に來り時と智嚢とを絞りたる幾多の人ありけるも、而かも其受けたる報償は何ぞや、平和と満足とを得て、静平の休息に入りたることありや、未だし、一時眩惑すべき水泡に陷りて在らゆる他を忘却せるまことあるも、後に至りて荆棘あるに心付けり――此荆棘は過去をして唯一の苦き記臆、永き深刻ある痛恨と化し去らしめ、満足にあらざるのみあらず忽ち消失すべき一時の狂熱の喜悦にして、此れを得ざりし前よ

りも生命に二層不幸を覺ゆ空しく模索せるも飽くことを得ざるものゝ為め勞力を費して爾かも見出すこと能はざりしは誠に悲むべきことなり。

快樂の渴仰者にして偶々之れを見出せる者の中ロード、ナエスタープ并ールドを以て最さなす、浮華なる快樂の鍍金せる、且つ其淫猥なる歌の反響する途に就きて満ち足れる生命を得るものさせんが、流行社界に持て囃され、快樂の手にて織り成せる在らゆる花冠を其の足下に並べられたる此の交雅華美なる人こそ此れを見出せるならん若し彼れの如きすら見出すこと能はずとせんが到底快樂園に通ずる道路によりては満足を得るの望あることなし、去れど社界の名星たる彼れが斯くも眩惑すべき生命但し神を有せざるの生命に對し言ふ所を聞け彼れは「智者の王にして又候伯中の智者」と歌はれたり、彼れは人類の享受し得べき快樂の総計

を得たり、彼れは盃の滓をも飲み盡せり、快樂の生命に就き斯界の名星の光輝を放ちたる彼れは何と言ふぞ「世の快樂は吾れ之れを一身に受けたり、爾かも之れを失ふて悔ゆる所なし、余は背景を見たり、余は粗製滑車と垢染みたる索條とか派手なる器械を運轉するを目擊せり、又無智なる觀者を驚かせる凡ての裝飾を照す蠟燭を見且つ嗅げり、余は恰かも亞片を服用せし者が夢より醒めたるの心地す、而して重ねて之れを服用するを望まざるなり」と、此に於て余は快樂の渴仰者に對しては富の渴仰者に對すると同じく「汝等何故に飽くことを得ざるものゝために勞するや」と言ふを憚からず

去れど尙未だ命名せざる方面にして人々が滿ち足れる生命の幸福を得んと試むるものあり、此れ他なし世人の所謂名譽と稱する報償を得んとすることなり、世には世人の賞讃を渴望し、吾人の

名譽と稱するものを求むるに此れ日も啻ならざる人あり、蓋し「名譽と恥辱とは其來るや何等の條件あるに非ず、唯能く己れの務を盡せ、凡ての名譽は招がずして至るものなる」を忘却せるなり。

退いて吾人は世の名聲を博することにより安心立命の域に達するを得る望を有するを過去の經驗によりて攻究せざるべからず、名聲の喇叭を響かせし者は誰ぞや、全世界をして征服者として膝を其前に屈ましめ、世界諸國民をして足下に叩頭せしめたるアレキサンダト大王なりや、彼れに滿足ありしや、言ふ勿れ、彼れは既に他に征服すべき世界なしとて嘆せるにあらずや。

ナポレオンは如何、彼は其足下に横へられたる王冠と彼れの生命を壓倒する斗りの名聲とによりて得意此上もなかりき、然るに次て來れるものを見よ、彼れの大望碎け果て、最早自已のものならざるを孤島に獨り嘆ぜるに非ずや、世の大人物の名簿を讀み上げ

んか、彼等は何れも其成業の物語を傳ふるならん、若し此等貴しき名譽の喇叭を聞きし者に尋ねんか、必ずや其中心未だ滿足の徹底せざる所ありて存せるを告ぐるならん、若し彼等に貸すに爾后一千年の生命を以てするも、斯かる追求をなす間は、到底滿足を有することを得ざらん、夫は斯かるものをのみ追求する事は單に慾望に慾望を增し、此れを所有するに至れば、更に以上の要求を加ふるのみなればなり。

恰かも渴を止むること能はざる不幸なる酒客の如きのみ、强き飲料に對する渴望を飽かしめんか渴き愈々增し遂には己のが酒慾のために其身を滅するに至らん、夫は恰も火に油を注ぎ猛火に薪を加ふるの類のみ、而して一も此等のものによりて飽くことを得ざるの理は、神吾人を爾かく創造し、玉ひたればなり、神の吾人を造るや、神に於てのみ飽くことを得るの特性を與へ玉へり、此性や

深甚にして遠く肉体の境涯を脫離し、滅びざるものに信賴するに至る迄は決して滿足を得る能はざるものなり、神を離れて幸福安全の生命を得んと務むるも凡て悲むべき同一の結果を來すのみ而して惠深き天父の慈言は五里霧中に彷徨する人類を追求す、何故糧にもあらぬものゝ爲めに金を出し、飽くことを得ざるものゝ爲めに勞するや」。

さは去り乍ら神は人心を不幸絕望の淵に殘し給ふものに非ず、四面楚歌の聲の中にある人類の絕望の打擊を破りて「我は渴ける靈を飽かしむ」この慕はしき神の御聲聞ゆ、而して滿足を得んがために在らゆる場所を探りたる人々に向ひ吾人は諸子の心中神を慕ふの念あることを回顧せしめんとす。

「鹿の溪河を慕ふが如く我靈は汝を慕ふ、生ける神をぞ慕ふ」多年已の靈を滿足せしめんと願ひて何處にも見出し得ざりし幾多の

人々は其求むる所一も殘す所なく神に於て見出せることを証するなり、宿年の希望、大願、欲望は神が苦悶せる諸子の心靈に向ひて「平和あれ、靜平あれ」との宣へる時充實せられて光彩を放つに至れり、而して生命の不幸を感ぜるもの、神なるキリストに接觸するに及びて、心中天の喜ばしき音調新たなるを知るに至れり。

傳ふる者あり、オールブルの友人なりしジャン、エリクソンは已れ音樂の趣味を有せざるを以て、大音樂家の奏樂を聽くことを拒めりと然るに或日ヴァイオリンの名手彼發明家の作業場を訪れヴァイオリンを示して少しく樂器に故障あることを說けり、木質纖緯及音調の說明をなせる后、ツト弓弦を取り糸をすり奏樂を始めたり、エリクソン知らず知らず釣り込まれて夢見る心地なりしが、樂終るや目に涙を湛へて曰く「續て奏せよ、余は我生命に欠くるものありしを今迄心付かざりき」と世の幾多の人に於けるも亦斯

くの如けん、生命の何處にか滿足なく、眞美の愛なきもの、時ありて神を慕ふの念起りし時、キリストは人心の緒琴に觸れたり、其震動は嘗て已のが生命に宿すこと能はずと斷念せる喜と滿足とを喚起せり、而して今や長く心中に止まり給へと、主に求むるに至りぬ百方策盡きて主に來りし時我等は叫べり Eureka(我之を見出せり)と余は余の心靈の望を握れり、余は滿ち足れる生命を得たりと、實に「彼は渴ける靈を滿足せしめ給ふ」

余は今や神を離れて滿足を求むるの無益にして愚なる所以を明かにせり、而して神は人を飽かしむるを得べく、又飽かしめんとし給ふとの約束の誤りなきを自から揭示し玉ふ、而して此事や幾千の人々が擧りて自から神に來りて滿足を見出せるを証明するに、諸子は却て破れたる水槽に就くは何ぞや、生ける源泉に來らざるは何ぞや。

人を滿ち足らしむべき神の大能の力に就きては疑を挾む余地なし、神を離れて人々の求むる凡てのものゝ失敗は萬人の証する處なり、而して此短かき生命の貴き時日を虛榮を求めつゝ浪費することは神明に對する罪決して小なりと言ふべからず、「神を恐れ其誡を守ることは各人の義務なり」と知らずや。

生けるも死するも人生を滿足せしめ得るもの一あり、傷痍を癒やし、心靈の傷口を包み、在らゆる秘密を解明し得る唯一のものあり、若し滿ち足れる生命の秘密を知らんと欲せば、諸子宜らく此れに來らざるべからず。

今を去る二十余年前、大統領ガーフィールドの刺客に砲擊せられたる當時を記する者多からん、今其當時を追回するに我國民は希望と恐怖の中間にありて苦悶と煩惱の八旬を送れることあり き、遂に長く地上を蔽ひし疑懼の雲晴れて國民は擧つて狂亂の悲

に陷り全世界は爲めに優しき同情を以て臨めり、世界の各地より大統領を失へる悼める未亡人に對して吊詞を送り來れり、王國も帝國も共和國も我れ先きにと爭ふて同情を表するに務めたり、余は素より此等の同情に對し何れを何れと區別するを好まずと雖とも、爾かも他に優りて崇高なりしと思ふは貴き英國女皇陛下よりの夫れにてありき、曰く「神、夫人を惠み慰め給はんことを祈る、夫は神のみ此れを良くすべければなり」と女皇は徒らゝ此言をなせるものに非ず、公アルバートの死せし日、親しく經驗し、在らゆる同情と世界よりの吊詞にも優りて眞の助けは神より來るものなることを記臆し玉へるなり、故に曰く「神のみ此れを良くし給ふ故に」と。

故に余は此れを言明せん、神に於てのみ我が最も望む所、我が心渴し靈飢うるものを見出し得るなりと、路に當りて輕少の障害な

しさせざるも各般の需要を満さるゝこと疑なく、最終の勝利は確實なるべし、而してキリスト、イエスの中に満足の生命を持續して常に凱歌を唱ふることを得べきなり、

「我れキリストの姿にて甦生するとき満ち足るを得ん」。

裕かなる生命

「我來るは彼等に生命を得しめ且豐かならしめん爲めなり」

（約翰傳十章十節）

イエス、キリスト已れを指して「我は途なり眞理なり生命なり」と言へり、而してヨハネの福音書は我等をして此れを信ぜしめ且つ「信ずることに依り其名に於て生命を得るに至らしめん爲め」に記されたるなり、生命の源泉はキリストにあり、而して誰にても彼を信ずる者は限りなき生命を有するを得べし。

然りと雖とも信ずる者の生命の主要なる喜は、常に其默示に表はるゝ更に善きものあることなり、夫は叙上の本文に於ても、キリストは其崇高なる目的を有し玉ふの意を明かにし玉へはなり、而して夫は裕かなる生命を吾人に與へんとするにあり、神は常に吾人を警醒して高きを思はしめ、貴き生活を送らしめ、大なる行爲を遂けしめ玉ふ。

默示に表はれたる一の目的あり、人は此れぞ最高のものなりと思ひて足を向けて進む、去れど一度び其目標に到達するに及びては更に高き目標の目前に開かるゝを見て啞然たることあり、故に至眞至善に向つて活動する生命には、絶ゑず前面に一層善にして大なる或物の存するあり、而して彼方の山頂に最良のもの存すと思意するも、希望の及はぬ所に神在まし、神は更に遙かに、更に廣大なるものを有し給ふ、再言すれば人自から思意するよりも神は我

等に、より善き志望を供し玉ふ、吾人善を求む、去れど神は我等を激勵して更に善なるものに進めんとし給ふ、既に此のより良きものを得て滿足すれば、神は我等に最上を有せしめずして止まず、而して、吾人成効の要訣は此最良を追求するにのみ存す。

嘗てニコラス皇帝、全世界に於ける最良の觀測所を建設せんと決せり、此目的を以て皇帝は有名なる天文學者ウヰルヘルム、ストルーフに費用を懸念せずして此れが建設に從事すべきことを命ぜり、セントペテルブルグ市附近のパルコバに建設せられたるも乃此れなり、業成るに及び皇帝臨幸親しく之れを視察せらる、場内限なく巡視の后皇帝は所長に向はせられ、彼れが此建築に滿足せるやを問たせ給ひたるに天文家は當分滿足なる旨を奏上せり、其意蓋し日新の發明發見のなさるゝありて新規にして更に良好なる器械の要求が日に迫りつゝあるを目睹するの時に當り、彼れの

心は更に遠大なるものに向上するの必すべきを知りければなり而して此れキリストの中にある吾人の生命に於て常に然りとす神を知ることにより一層大なる智識の希望を喚起增進せしむ、此に於て生命は誠に幸あるものとなり、我等は更に裕かある生命を希ふに至る、此れ智識と恩惠との領域に入りたる在らゆる大偉人の經驗せる所あり、示現に映する所大なれば大なる程、吾人濶大を望むに至る。

アイザック、ニユートンが「人は我れを如何に思ふやを知らずと雖ども、自からは海濱に嬉戯して折々珍奇なる介殼を探し居る小兒の如きものなり、眞理の大海は蔽はれて眼前に横はる」と言ひしは實に此理なりとす。

人心の大部を占むる此思想は、其源泉に遡りて始めて神の大目的を發見す、夫はイエス降世の使命は啻に人類に生命を與ふるの

みならず、豐かに之れを與へんとするにあればあり。

吾人神の事業を見る毎に神は人類總般の必需と在らゆる貴き望とに對して豐かなる準備をなし給ふことを自覺せずんばあらず、自然の敎ゆる所は豐富の敎訓なり、若し人あり暴慾貪婪にして自然の溝渠より價なしに賜ふ神の恩惠を他に轉向することありとも、夫は神が豐かに準備し給ふ事實を變更することあたはず、誰れか大空に炫耀する星の數を數ふるを得んや、誰れか昔し乍らの大海の水の乾くことを豫想すべきぞ、誰れか茫漠たる未耕地の生産力を爭ふ者あらんや、誰れか人類のために地中に貯藏せられたる石炭、鉄、銅若くは金の無盡藏を測ることを得んや、此の如く神は吾人をして靈界の供給も同じく豐かに無限なる事を知らしめんとし給ふ、彼れ我等に向ひ「其快樂の源泉より飲め」と宣給ふ時、斯かる思想は豐富を偶意す、而してキリストに於て生きたりとも、進ん

で深くキリストを知らんとの欲望なくんば此れ靈魂を痲痺せしむるものにして偶々精神衰弱を來す原因となる、

神の生命に入りし者は何れもより大なる生命を得んとの望を起したり、去れど悲むべし屢々此れを失ひ其望消え行かんとし俗流滔々として靈魂を蔽ふに至ることあり。

「吾人は嘗て人生の煩鎖の裡にありても握ることを得と思意せる高貴なる生命の理想を有しき、其翼の音は愈々近く、恰も掌中のものと思ひし程に響けり、實に然り、去れど日毎の爭論と煩悶の中に之れを見失へり」。

「我來るは彼等に生命を得しめ且豐かならしめん爲めなり」、豐かなる生命の一特徴はキリストに於ける信仰の確實なるにあり、吾人は決して凡ての事物を知ることいふに非ず、何となれば「我等は鏡によりて朧に見」而して「知る處一部分に過ぎず」、斯くの如く多く不

可解の事ありとするも重要なる問題は確定して何等の疑團あることなし、然らざれば生命は此れあらんも、夫は單に生存すといふに過ぎずして、決して豐かなりとは稱するに足らず。

時に疾病の危難に遭遇し、病者は死の蔭に下りしかと怪まれ、且つ其重患に陷らんか生死何れかを區別することすら困難なることあり、此時しも滅せんとして尙ほ消ゆざる生命の曙光表はれ快癒の望あらん、さはれ危機眞に迫るに至りては其生けるや死せるやの分別も附かぬ理あり、信仰の領土に於けるも亦之れに同じ、若し吾人にしてキリストの中に立つの確實なる智識なく、吾人の靈と救世主の間に繫る重大なる問題ゐして解決せざらんか、豐かなる生命は得て望むべからず、故に領土の擴大と高貴とを望む者は此等根本の主義を解得せざるべからず根本主義とは何ぞや、宥罪、キリストに依る救の保証、變らざる神の愛、祈禱に答へんとの神の

準備此れあり、更に向上一轉して吾人はキリストの教理の根本主義を去りて完全の域に達すべきに非ずや。

以上論定せる諸問題に就きては能く之を自覺せざるべからず然らざれば心中の平和は得て望むべからず、且つや豐かなる生命の如きは吾人到底門外漢たらんのみ。

去れど吾人ゐ敢て心中の苦悶と外界の爭鬪とを知らざるを言ふに非ず、何とゐれは吾人如何に明かに信仰の喜を感ずるに至りし后と雖とも、過去幾年の間感染し來れる惡習弊風は往々追求し來りて嘗て罪の奴隷たりし事を追想せしむることあればなり。

ギツボン言へるあり、羅馬皇帝の中に不思議ゐる天運によりて牢獄を脫し王者の冕を戴くことゝなれる者あり、しかはあれと突差の事とて鍛工を得ること能はざりければ、數時間手錠を施せる儘カイザルの位に坐せりと、彼れは斯く手錠と有せり、爾かも王者

たるに於て何かあらん、彼は王冠を戴き榮光の坐にありて民衆の祝賀を受けたり、但し程なく過去の纒紲の遺物は失せんとするなり、若し諸子の生命に於て、過去の思想、慾望、罪惡の苦闘等の屢々起ることあらんも、神の後繼者たる實証を見、豐かなる生命とは層一層完全なる解放にして在らゆる鎖鑰を脱して永遠のキリストと限りなく王座に就くの日を喜ふべきなり。

豐かなる生命の他の實証は吾人の靈魂が斯かる生命を渴仰するの事實なり、「飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は幸なり」。

神によりて一層大なるものを得んと渴仰する靈魂はキリストの說き給へる豐かなる生命を有することを証するものなり、高尚なる目的を有する生命は神に於ける其貴き運命を自覺するの結果なり、而して世に神の形に似て造られたる生命にして五里霧中に彷徨するより悲むべきものあることなし、實に吾人は眼を光明

に向け、常に神に屬する大なるものを望みて進むべきに非ずや。

低きを望む——此は人類のなすべきことに非ず、此は信仰を否定す此は神を知らざるものゝ性格と特質とを有するものなり

高きに志す——此は眞に高貴なるものゝ徵號なり、此は我等神の子たるものゝを表す、此は吾人が神に似るものゝを得んとの神約に對する信念を表す、此は吾人が豐かなる生命に入れるものゝを明かに宣言するものなり。

「初めを大にせよ、よし一行を草する時日を有するのみにても、其一行を雄大ならしめよ、失敗は詮なし低きを望むは罪なるぞかし」。

世の豐かなる生命を渴仰する輩よ、目を擧げて見よ、航海者の眼中激浪も暗黑もあるなし、望樓より大空の星を望みて目指す港に船を進むるに非ずや、キリスト、イエスに在りては如何なる最高の

望も決して過大なることなし、最高の途より吾人を誘惑し去らんとする妖魔の聲に耳を背け不撓の勇氣と不動の信念とを以て目標に突進せよ。

如何なる點よりするも豐かなる生命が最も望ましきものに非ずとの偶言を容るべからず、此を身体に譬へんか、豐かなる生命を有するは強壯の狀態にある生存を意味し、然らざるは病魔に犯されて絶ゆず醫療を仰ぐ者に同じ。

豐富なる生命は喜樂にして重荷に非ず、罪惡に導く誘惑に非ずして却て此れを防ぐ武器なり、又罪惡の侵入する門戸たることあし。

罪惡の、人の道德性に於けるは疾病の身体に於けるが如し、罪は内部にあり又外部より來る、疾病の胚種は凡て吾人の周邊に存す去れど内に外部の禍根に反應するものあるに非ずんは、罪惡は如

何ぞ内部に安息所を見出すを得ん、遂に人を害するの力を失ふに至らん、醫學家は曰く、病菌の攻擊に對する最良の豫防劑は身体を強壯態に維持するに優るものなしと、強壯なる健康体は侵し來りて組織を破壞せんとする黴菌に反抗するを得しむ、去れど弱者は屈服して此れが不幸なる犧牲とならざる可らず、吾人の知る所に依るも傳染病に罹りしかも何等の傷害を蒙ることなき者あるに他方に於ては又同一の病に侵され此れを退くること能はずして遂に犧牲となり終れる者あり、此間の差異何に依るぞ、病症に異なるなく境遇に差あるに非ず、何となれぞ黴菌は全然同一なり、其激症なること又相等し、故に其差異は人に存するのみ身体の狀況に依りしなり、完全なる健康と体格とは前者をして之れに抗するを得しめ、纖弱は後者をして容易に犧牲に擧げられしめたるなり、故に醫家曰く、吾人に必要なるは一般の健康を調整するにあり、換言

すれば豐かなる身体は吾人を倒さんと共力する在らゆる疾病に反抗するに至るべしと言ふにあり。

吾人今此法則をキリスト者の生命に適用せんか勝利の生命を得る秘義を知るを得べし、人多くは誘惑の襲ふ所となり打擊に勝ち得ずして降服するも、又同一の敵に遭遇して勝ち終ふせる勇士もあり、何故に斯く異なるや、其差は誘惑其物に非ずして全く人にあり、一は豐かなる生命を有しければ誘惑も一度び其勢力圏内に來るや力を失へるなり、他は豐富なる生命を有せざる故に抗する能はず。即ち靈的病魔に犯され居るが故に容易に四圍の罪惡に捕へられたるなり、此病魔に對する良藥は吾人の靈性を調節して神力の潮流を自由に流入せしむるによりて得られん、而して神は實にキリストが來りて吾人に與へんとせる豐かなる生命の源泉なりと知らずや。

而して夫は心中の禍根に對しても同時に最良の醫藥なり、內心に纏綿する惡舊慣や脫離すること能はざる習俗に對しても亦然り、兄等の中生命に深く根底を据ゑ到底免るゝこと能はざるが如き惡習若くは夜な夜な惡夢に襲はるゝが如く遂に逃避する力なき程の偏癖に對し多年熱心に奮鬪せることありしや、見よ此所に良藥ありキリストの豐かなる生命、神の滿ち足れるが如くに豐かなる生命、此れぞ其ものなる。

讀者は特に森林に至りて凡ての樹木が赤裸の狀態にある中に一株の樹に枯葉の附着せるを見しことあらん、冬の長き此樹の屹立する限り枯葉又幹に固着し雪に堪へ寒風暴雨を凌ぎて春再來の期に至る迄依然存在す、然るに此樹の生命は今や中に渤々たるの時、幹も枝も此力を感ずるに至り何時とは知らず靜かに葉は落ちて其跡を止めずなりぬ、樹の溢るゝ斗り豐かなる生命に搖り落

されしなり、冬の烈風は此れを離すこと能はざりけり。

此理に依りて吾人もキリスト、イエスの生命に滿つるに至り、即ち豐かなる生命を得るに至れば吾人を襲ふ强敵を斥けて、中なる誘惑にも打ち勝つことを得るや明かなり。

更に豐かなる生命とは他人を助くる事を得る唯一の生命なり而して吾人にして他人を助くることを能はざらんか吾人の生命は失敗なり、若し吾人にして世の悲哀を慰むることをせず、其重荷を負ふことを肯ぜず、其罪を責めて人類を神に復歸せしむる事能はざらんか、吾人は主の「伐りて棄てよ焉んぞ地を塞ぐ可けんや」と宣給へる樹に異なる所あらんや、吾人何ぞ唯地上の障害物となり神の下し給へる大なる恩惠を感謝せざるべけんや。

若し吾人にして此世を去るに當り、生れ出でし時より少しにても世に改良の跡を止むる能はずんば、神の賜ひし生命を返上せん

時如何なる答をかなすべき、吾人の答は預金の報告を求められたる彼の不忠なる番頭の如く「我懼れて行き主の一千の銀を地に藏し置けり今爾汝の物を得たり」と言ふの外ぞなからん、悲むべきに非ずや。

有用なる生命――此れぞ神が此世に求め給ふものなり、然り已のが貴き行爲により又高潔なる品性によりて人生の品位を高め、永遠に傳ふべき人類に對する感化を喚發するの生命なり、貴しと見ゆる世の標語を採りて此れに代ふるに更に貴くして良きものを掲ぐるの人なり、何となれば吾人の周圍には人類を壓服すべき幾多の傾向あるに關らず多くの人の達し得ざる極めて崇高なるものに向て「生きよ長命なれ」と言ふは高潔なる情操たるべきこと論を俟たずと雖ども、進んで最も高貴なる信托を全ふする生命の言はん所は更に良きゐ非ずや「生きよ、而して人世を助けよ」と人

は唯我欲を制して人に重荷を負はしめざりしを以て全しと言ふべからず、彼は「互の重荷を負へ而してキリストの律法を全ふせよ」と言ふべきことを學び得たり、此れぞ世人が立ちて幸なる哉と叫ぶ有用なる生命なり、眞に高貴に與せんとする者は唯に他人の障害とならざるのみならず、又他人に損害を與へざるのみならずして眞に有用なるべき場所に居を占めん事を望む、爾かも此れをなすには豐かなる生命、充ち足れる生命を有せざる可からず、而して恰かも溢るゝ泉の水流れ出でゝ勞れたる旅人を生き返らしむる如く豐かなる生命に於ける熱情の溢出も斯くの如けん、斯くして吾人が勝利と喜悅の源なる、罪惡に反抗し得る力と並びに吾人の有用なるまとゝはキリストに於ける豐かなる生命を有するに至ることゝ相關聯するものなり。

或人曰く我等は財寶を崇拜し、社界の進歩革新の機を誤り唯、パ

ンヤンの示現に表はれたる人の如く王冠を捧ぐる天使を閑却して世の雜枝と藁條とを採集して舊道をたどるのみと。

何事ぞ、吾人は自已に對し同胞に對し神の無上の光榮に對して最上なる所のものを犧牲に供して迄も霧の如く消ゆ夢の如く空しく不滿足なるものを追求せんとするか。

支那に於ては生前世に名をなせる人にして死刑の宣告を受くる時は、自から金箔を以て咽喉を絞め或は銀線を以て絞首するの特權を與へらるゝと、此れと同じく世には自から窘縮して大なる生命に達するまとを妨ぐる人の何ぞ多きや、良し彼等は靈的自殺を企つる者にあらずとするも、自已の放縱なるため大なる希望ゐ入るまとに反抗するに依り生命を短縮しつゝあるなり「我來るは彼等に生命を得しめ且豐かならしめん爲めなり」。

吾等生を此世に享くる者に對しては神は喜んで更に豐かなる

生命を與へ給ふ神の喜び給ふは我等の求むる所小なる時に非ずして多く求むる時にあり、而して其名を信ずる者に限りなき生命を與へんは神の最高の喜びなれば、更に豐かなる生命を己のが民る與へんことは其最大の願なるや疑なし、何ごとなれば吾人の生命一層清く高く聖なるに至るは更に多く神を崇むる所以なればなり。

去れど未だ神よりの生命を受けざる者に對しては豐かなる生命は得て望むべからず、夫は唯其名に依りて先つ生命を得たる者にのみ與へらるべければなり、生命を與ふるは主が降世の目的なり、我等に生命を與へんは主が十字架上に死し給へし所以あり、而して滅ぶる事なき生命を得ることは能はざる唯一の理由は已れの心に存す、神の價なしに賜ふ生命と、其對價は死なりといふ罪と何れをか選はんとするや、愈々輝きを增して晝の最中に至る光明の

途を選はんとする乎、將た又暗に暗を加ふるに至る途を採らんとする乎、何人と雖ども他人を强ゆることは能はず、去れど若し自から之れを得んとすれば世に神の最大の恩惠を妨ぐるものあるなし

此所に生命あり、百花爛熳たる花園、豐饒なる田圃、見渡す限りの垂り穗、盡きざる果實あり、此所に死あり、突兀たる山岳、炎威激烈なる砂漠、人嘲けるが如き擴れる瘠地のみ、何れか諸氏のものなるべきや。

マヨデッタの嶺はビレニース山脈中の覇者なり、時に人呼んで「詛はれたる山」といふ、其頂は四時の雪を戴き、其凸凹ある山腹は鎧の如く氷を以て蔽はれ、作者の所謂大拍車の如き鋭峯に貫かれ如何なる動植物も夫れ荒寥不毛の絶壁に生を保つ能はず、農夫は此山に就き一の說話を有す、彼等は此峯は嘗て美はしき牧場に蔽はれ、群羊の草食ひし所なりと信ず、傳へ言ふ、キリスト嘗て牧羊者と

此所に訪れけるに彼は却て石にて擊たれたり、此に於て山は直に岩石と化し氷塊と變じ去り其上に住める凡ての生物は滅びたるなりと。

以上は一片の傳說に過きずと雖ども、此事や偶々大生命の支配者を峻拒する人類の狀態を寫すに非ずや、何となれは眼前に如何なる希望の橫はるあるも、一度び神の、子を驅逐せんか望は消散し花は凋み、生命は荒れ廢れて果を結ぶことなければなり「見よ我れ今日目の前に生命と死とを置けり、故に生命を選べ」。

勝利の生命

「我等を愛める者に賴り凡て此等のものに勝ち得て餘りあり」

（羅馬書八章三十七節）

キリスト者を兵士に擬し、戰場の突擊を引用してキリストの弟

子たる者の鬪爭の狀態を說明するはパウロの喜んで採りし語法なりとす、彼は吾人を警告してキリストの善き兵士の如く困難に堪へ神の完全なる武具を衣、義を帶として腰に結び、信仰の盾を取り、聖靈の劍又救の冑を取るべしと言ふ、此れ靈界の鬪爭に備ふる所以なるのみ、我等の中に二個の勢力ありて絕らず覇權を爭ふもの、古き生命と新しき生命此れなり、一は「罪と死の法則」に從ふべき生命にして、他は「生ける靈の法則」に支配せらるゝものなり。

此の鬪爭は凡ての人の熟知する所なり、世人は亦此鬪爭の極めて猛烈にして、時としては凡て勝利の望なきをさへ感じたることあらん、何となれは吾人の信仰薄弱なる時は吾人を攻むる勢力は我等を保護する勢力より遙かに强大なるが如く見ゆれはなり、余は單に「見ゆ」と言ふ、夫は眞に然るには非ず、見よ神を有する者は常に優勢にして眞理と正義とは到底勝利を得るものなればなり。

然りと雖ども勝利の生涯を送ることは我等の良くする處なりや、吾人如何なる世の攻撃の中に突進し、在らゆる誘惑に遭遇して凡ての重荷を負ひ尚ほ勝利を得て凱歌を唱ふることを得んや、百千度び此問題は提供せられたり、而して其回答は百人百色なり、或人曰く此れ不可能なりと、而して此れを立証せんが爲めに幾多の碎けたる生命を指摘す、又一時は勇敢に潮流に抗せしも聽て逆卷く激浪のために洗ひ去られたる人々を例示す、又人生の不幸失敗の例証として自殺の狂行及慈善共同墓地に於ける姓不明と記されたる墓標を指示す、或は大望を放擲し慾望に頓挫して凶器を手にし「我は人生の爭闘に破れたり」との最后の痛句を殘して死せる者のあるを思ひ起さしむ。

次に叙上の如き暗黑なる光景に非ずとするも尚ほ人は幾多の跳者、不具者、盲者終世苦闘し四圍の罪惡を辛ふじて逃れ得たることを述べて此れ決して勝利を云々するに足らざるを言ふ、素より此れを見苦しき失敗とは言ふ可からざるも、決して上乘の勝利とは云ふを得ざる可し、茲に於てか重ねて彼の「人類は遺憾なき勝利の生涯を送ることを得るや」の問題は提供せらる。

然り、神然りと宣告し給ふ、神我等をして此れを確認するを得しむ即ち吾人は標題に示す如く凡て此等の事に勝ち得て餘りあるなり、願はくは吾人をして「我等の主イエス、キリストに依り我に勝を得しむる神に感謝す」と言ふを得せしめよ。

四百年の昔、瑞西のフリボージ市を距る十哩の附近に於て瑞西人がバーガンディー人を撃破せる戰は起れり、民は何れも鶴首して戰報に接せんことをのみ待ち居たり、而して今や一青年は此待ち侘びたる民に勝利の喜を傳へんために急げり。

彼れ樹の枝を折り頭上高く此れを翳し、十哩の道程を息もつか

ず疾驅せしかば其市に到着せし時は勞れ甚しく唯一言「勝利」と叫びたる儘息絶へたり、神の能力を我生命に感知するに依りて「勝てり我等の主イエス、キリストに依りて」と言ふを得んことは抑も吾人の願なり。

人類多しと雖ども標題の如き勝利の語を述ぶる特權ある者、蓋しキリストに對する長き奉仕の歲月に於て、尋常人に與へらるゝより多く主のために苦鬪を經驗せる彼れ使徒より上なるはなし。

彼れが述懷に表はるゝ經驗中、殆んど信ず可からざる程大なる爭鬪あり、去れど彼はキリストを愛するの愛極めて大なるゆ故に凡て主のために苦むに足る者とせられしを感謝して潮流を乘り越ゆたるなり、此くの如く彼れの勝ちしと同一の能力に依りて勝利を得るの望歷々たり「凡て此等の事に勝ち得て餘りあり」。

我等の勝つべき特種の境遇は彼れが書中に記載する所の如し

即ち艱難、苦辛、迫害、飢饉又裸体、危險、劍の難等にして、此れに含まざる艱難ある事なし、我等の受くる又受けんとする困苦は皆此の中にあり、內外より吾人を攻擊するものは玆に網羅せられたり、去れど「勝ち得て餘りあるべし」とは主の約束に非ずや、但し「勝ち得て餘りあり」とは何を言ふか、戰に勝ち敵を擊ち破ること此れ或人の望む所なるのみ。去れど主の約束中には更に大なるものありて存す神が彼れを信する者に與ふるは素より敗亡に非ず、又單に勝利と言ふに非ずして榮ある勝利なり、此れぞ眞に勝ち得て餘りありとは言ふなり、辛ふじて勝ち終せたりと、いふに非ずして優勝を意味す、勝利の潮流を敵に浴せ、掛け蒼空に凱歌を反響せしむるにあり極めて樂しき歡聲を發し人をして神の恩惠に依りて戰場より敵を擊退し、銃砲を靜止せしめ、在らゆる砲台を沈默せしめ、且つ天使が歌ふ「彼等は見事に勝ち得たり」との歌聲場裡に吾人ゆ神よりの

花環を戴くべきを見せしむる事なり。

勝利の生命――夫は神が吾人に與へて送らしめんとし給ふ光榮の生命なり、願はくは吾人生き返れる丈夫の勇を鼓して立ち勝利の生涯を送らん哉。

讀者は誘惑に襲はれ、惡魔が爭ふて心靈を奪はんとするが如き境遇に遭ふことありや、唯に諸子は之れに勝つのみならず敵を全く戰場より驅逐するを得べし、而して神の子の一人の如き充ち滿てる氣力を以て立つことを得ん、罪惡の勢力が到底吾人を襲ふことを得ず、生命の誘惑も吾人を壓倒するまとなかるべき所に住ふことは決して不可能に非ず「我等を愛する者に依り勝ち得て餘りあり。

去れど勝利は單にキリストに依りてのみ到達せらるゝものなるを記せよ、吾人の勇氣に非ず、吾人の誇れる元氣に非ず、吾人が高

峯を攀ち貴き勝利の高台に立ち事を得るは、唯我等を愛するキリストに依りてのみなり。

故に或人の思意するが如く勝利の生命なるものは試誘を除去するに依りて來るに非ず、此れ神が吾人に勝利を與ふるの道に非ず、世に苦悶なかりせば眞の勝利なるものあるまとなけん、故に人類を圍繞する誘惑を免れんとするの願を以てキリストの生命に入らんと想像するは非なり。

「わが目のあたりに　あたはなきか
　潮の如くに　寄せくる見ゆ、
　奸惡なる此世は我を神に導く
　　惠の伴侶に非ずや」。

吾人の周圍には多くの敵あり、公然の敵あれば又秘かなるありて最高の安寧を傷んとす、戰場に公然戰を挑む敵あれば又伏在せ

る敵あり、好悪にして吾人の備なきに密かに現はれ來る敵あり、吾人の事業を破壞せんとして同盟する幾多の惡の力あり、而して斯かる大敵を擊退ずるに當り如何に吾人の力の足らざるを覺ゆるよ、去れど記されたる所を見よ「主の天使は彼を恐るゝ者の周圍に營を聯ねて彼等を救はんとす」と、又曰く「イスラエルを守り玉ふ者はまどろむ事も又眠ることもなからん」と、良し敵の軍我に百倍すとも勝利は常に信する者に臨まん。

茲に自然に起る問題は、若し我等神に屬すとせは何故に神は斯くも烈しく敵の矢先に吾人を苦め玉ふや、又何故に神は斯かる混亂の光景を吾人の前より除き給はざるかといふに在り。

去れど吾人は神は善なり、又神は熔爐に吾人を投ずるに當り鑛滓を除くべき要を認めて、潔めの方法を備へ給はざることなしとの不變の教訓を知らざるべからず、鑛石には多く泥土の混ずるあ

り、故に此れを精錬せされば價値なきなり、此れ礦石を熔礦爐に入れざる可からざる所以なり、而して貴き鑛石ほど鑛滓より之を分離せんには火を熱すること強からざるべからず。

或は鉄の如き一週日も爐中に入れ置かんには收縮して遂に其影を失ふ事もやあらん、去れど凡ての鑛吾を除去せられて液体の形にて出て來る時は有用の地を充すに至らん、金の如きは之れと深き土中より發堀し之れを精錬するに必要なる打擊と極めて猛烈なる方法を經驗せざるべからず、去れど遂に王冕に嵌入せられて女皇の頭を飾る時、嘗て受けし如何なる試艱も物の數とするに足らず、斯の如く神の吾人に對するや、誘惑と重荷とを除き玉はずして却て之れを下し給ふ所以は、吾人が最も自由の身とならん爲めには切に斯の如き試錬を要するものなることを知り給ふ故に外ならず、故に神の下し給ふものなりせば吾人は困難も苦鬪も何

ぞ恐るゝを要せん此れ吾人の利益なれはなり、此れ吾人が清められて神に肖たる者となるに至るべき道なるを以てなり。

世に誘惑や重荷の存在する第二の理由は、世の神を知らざる人々が人生の大海に動揺せられ暗澹たる激浪に翻弄せられ時に誘惑と悲哀の淵に沈淪せんとすることあるを見て、神は彼れを信じ且つ愛する人に與へる恩惠の故を以て吾人や勝利の生涯を送るに充分なるあとを立証せんとするに在り。

人は常に言ふ「然り、然り、余も亦暖かき境遇に入ることを得可く配慮斯くの如く大ならず重荷斯の如く甚しからずばキリストを信ぜんものを」と、神の求め給ふものは然らず、其民をして不利益なる境遇と、大なる重荷と、堪へ可からざる苦辛と、壓迫する義務とを有して尚ほ且つ勝利の生涯を忠實に誠良に送らしめんことなり

此事たる少くも神の計畫考慮に出でしものなることを疑ふ能

はず、而して此れ吾人や大試誘——時に壓倒せんはかりの大難關をも通過する所以なり、良し此等の人類を襲へ凡てのものを逃る可きあとの約束はなきも、却て之れに優る約束を吾人に與へ給へり、此れ神が吾人と倶にありて敵の攻撃を利用し、戰勝者たるの喜を我等に與ひ給ふことなり、而して試誘もなく同時に神を知らざるよりも誘惑ありて神を我が味方に有するは遙に願はしき事なり。

勝利の喜を知り、勝利の凱歌を聞くの樂さよ、誰れや光明を一層美はしからしむる暗黑を喜び、平和を更に榮光あらしむる苦痛と勝利を一層高貴ならしむる戰爭とを喜ばざる者ぞ「吾等を愛する主に依り勝ち得て餘りある」ことを思へ。

キリストが我等を率ゐて勝利に入らしむるの途種々あり、第一に「天の中地の上の凡ての權は我れに賜はれり」との大主張を是認

し「見よ我は世の終迄常に汝等と俱にあるなり」との大約束を信ずるに在り、吾人唯「凡ての權力」を記臆し主の常に在ますことを忘るゝことなくんば、何物か困難にして爲し得ざるものあらんや、心に主の權力と榮光とを思ふことなき人が勝ち得可からずと思考せる困難は全く跡を止めざるに至るべし。

ナポレオンの露西亞遠征を企つるや、彼れの友は此無謀の擧を嘲笑し若し彼れにして少しくアルプス山脈の地勢を知るあらば此れを越ゆんとの念を斷つに至る可しと言へり、去れど彼れ手を振り之れを打ち消して曰く「アルプス豈に我が眼中に在らんや」と而してシムプロンの道路は築かれたり、高さは六千尺に余り之れに架する六百十一の橋梁は近代の最大工事の一に屬し、其奇觀后世の嘆稱措く能はざるものなり、斯くの如きは人の子の不撓の精神の力なり、進路を遮ぎる有形の障礙に勝を得しむるものなり、此

に於てかキリストの能力を知り、況んや其權力の注入を得たる人にして爲し得ざる事かあらんや、而して最終の勝利に達する第一着歩は實に吾人が困難を知りて此れを制服するに足る權力を確認するに在り。

神は彼を愛する各人の生命に新しき示現を與ふ、即ち彼れに依れ3可能性の示現なり、而して勝利の此示現と主を注視せる信仰の眼とを以て又は高貴なる生命の喜に進むべきなり。

次にキリストは人をして人生を混惑する事物に超然せしむ、霧や靄の最も多く集まるは平原と低濕の地に非ずや、去れど山腹に於ては精神を爽快にし元氣を旺盛ならしむる清く心地よき空氣ありて沼地の熱病、マラリヤ等に煩はさるゝ恐なきに非ずや、神其子を擧げて彼の高道1至らしめ、暴風を知りて尙ほ之れを脱却し耳に迅雷の怒號を聽くも其狂累を逃れしむ。

瑞西の山間にありて牧羊兒は綠の牧場を逍遙して山間遙かに群羊を逐ふことあり、時に足下に卷雲の起るありて眼下の村落は一陣の驟雨を浴る時、彼は依然日光に浴しつゝあり、暴風雨の響を耳にし目には電光の閃きを見、眼下の村落に降りかゝれる狂渦を知るときも彼れのみは雲に乘りて靜安なり、此くの如く人生の狂渦の裡にありてもイエス、キリストに依り暴風と苦悶との外に超越して神の心地良き日光を喜び受くることを得んと、吾人の勝利は暴風を鎭壓するに非ずして、此れに超越するに依りて來るものなり、猛烈の暴風の絶止するに非ずして其上に身を置きて其脅迫を耳ゐするも身に煩を感ずるゐとなきにあり、人は失望し「ソールの死曲」を聞く時に當り吾人は「ハレルーヤの曲」を喜はしく歌ふに在り。

基督に依る勝利！此れぞ人類の喜ぶべき希望に非ずや、豪雨に

挫かれ暴風に破られ、殆んど災害に脅迫せられたる我等に恩惠深きキリストは勝利の榮光を提供し給ふ。

吾人は彼の羅馬の戰勝者や勝利を得て目覺ましき凱旋の軍隊と共に勝利の紀念物を帥ゐて萬人歡呼の裡に聖道を歩み來りし日の樣を知る其制服せる諸國の王侯何れも鎖に繫がれたるが凱陣の班中にあり、彼の征服せる陸地の產、屈從ぜる大陸の岸を洗ふ河海の貴き產物は驚嘆せる民衆の前に展開せられたり、此はキリストに依りて在らゆる慾情を制服し、在らゆる誘惑に打ち勝ちたる生命の最も適切なる繪畫に非ずや、而して「雲の如き見物人」が我等を愛する者に依り吾人が得たる勝利を喜ぶ其樣に彷彿たるに非ずや。

勝利の生命の榮は神の子等や其父に依りて與へらるゝ報償にあり、神に咫尺し奉り其恩惠に浴せんと求むる者と神との間の聖

き關係は彼を愛し且つ其交際の惠を知る者に非れは得て解すること能はざるなり、而して神が我等に加へ玉ふ榮光は我等が受くる試誘の如きに非ず、我等が負へる重荷に比すべくも非ず。

カリギュラー帝即位の前、其爲めに大なる悲哀と苦痛とを受けたる一人の官吏は、后彼れが牢獄の裡に在りて着けたる鉄鎖に等しき重量の金鎖を報へられたり、而してキリストの爲めに勇ましく且つ忠實に其十字架を負へる者には、神の恥かしめに遭ひし日の凡てに優れる榮光を彼れに報ひ給ふや必せり、但し此報償たるや世人が見得る形に於て來ることあり、又然らざることあらん、去れど正義の良心に於て知るを得可く又特にキリストの爲めに生ける生命を稱讃する神の極めて靜かなる聲に於て知り得るやう明かに表はる可し、神を離れてなせる在らゆる聯合は屈辱自滅なり、神の嘉し給はざる辛勞は明かに失敗に終るのみ、而して神に連

なる者の勝利と確實なり、但し鬪爭の日、信仰の衰へたる間は何處に勝利來らんかは知る事を得ざらん、去れど堅き信仰の眼は依然遙かにありて見ざる者を拍手して迎ふる國を知るを得べし。

罪は敗亡を意味す、此より外に來るべきものなく又他に望むべくも非ず、唯キリストとの同盟は遂に終ることなき彼歌の始めにして、全世界が目擊すべき最終の勝利なり、凡ての他の生命に優りて慕ふべく、且つ求める者に神が直に與ふる生命なり、而して此生命には長くもあれ短かくもあれ終世變らざる喜の物語あるべく世を去るの日は平和と勝利とあらん。

誰れか斯かる生命を求めざるべきぞ、日毎傷けられ打たれ敗られて人生の戰場より歸り來る時、誰れか罪に抗し、周圍に蝟集し來る勢力を壓服する勝利を願はざらんや、而して此れ神が已れを愛する者に與へんとし給ふ所なり。

來れ、多年暴風と辛苦とを經驗せる者は來りて神の平和を味ひ勝利の人生を送ることこの如何なるものなるかを學べ、去れば遂に世を去るべき日の來るも目前に榮冠の我を俟てるを見るが故に恐るゝ所なかるべく寢床に就く者と同じく神に依りて目醒めんこの喜はしき希望を抱きて安息するなるべし。

サーウヰルヤム、ハミルトンが辭世の際、言へる所を聞け「然り、良し、我は死の蔭の谷を歩むとも禍を恐れじ」と。

此くの如く人は生きもし、死する事を得ん、時來りて世の爭鬪の中に殘る者、最終の遺言を吾人に求むる時吾人は「勝てり、我等の主イエス、キリストに依りて勝てり」と歡呼するを得ん。

永遠の生命

「我父の家には住居多し、若し然らずば豫め之を汝等に告ぐべき

なり、我汝の爲に所を備に行く」 (約翰傳十四章二節)

キリストの宣給ふ所は人類の言ふ所に異なる、彼と權威ある者の如く語り給へり、其引用する處は過去に於ける聖賢若くは預言者の言なるにせよ、現在の大問題なるにせよ、將又測る可からざる將來の事なるにせよ、其言ふ所に一點の疑團あるおとなし、其語調は確實にして權威あるものなりき。

幾度びか彼は先人の言へる所を引用して后「我爾曹に告げん」と嚴然たる語調を用ひて全問題に光明を照せり、聖賢や預言者やパリサイの人やサドカイの人は其思ふ儘を述べたり、去れどイエス一度び「我汝に告げん」と宣給ふ時、夫は凡ての問題に對する斷案たりき、此れ眞理の創造者の解說なればなり、而して現代に於ける最も感知すべき一事は人類や現時に於ける社界生活の問題の唯一の解決は彼のガリラヤ人や千九百年以前に呈示せるものなるこ

ことを知るに至れるの著しき事實なりとす、ヨシ神の子の權威を信ずる何等他の証憑なしとするも、過去の事物を凡て知り現世の問題を完全に理會せる彼れか、未來に就きて述ふる所必ずや確實なるべきを信ずるに足る。

本文に示せる句は、彼れか十字架を目前に控ひて立ちたる時宣給へる其昇天后に關する談話より引用せるものなり、夫は二個の暴風の中間に於ける靜安とも見るべきものなりき、一は弟子等か主の受けんとする苦痛を知りて驚駭と悲哀とを感じたると、他は其敵か主を捕へ無殘の手を下して此れを屠らんとせる時、主の聖き頭に彼れ懸らんとする狂暴の風なり而して彼の言句は暴風の中間に起りし靜安にして一は以て見棄てられんとする弟子の心中を慰め、一は以て身に振り掛らんとする苦闘に遭はんために備ひ給へるなり、此等不幸なる者に取り次の語か如何に天上の脈々

たる和風の如く感じたるべきぞ「爾曹心に憂ふる勿れ、神を信じ又我を信ずべし」而して主は光輝ある未來に目を向けしめて思を現在より離れしめんとせり、更に主は將來に彼等の目を向けしめて現在を忍び易からしめんとし給へるなり、實に未來の冠冕の輝きを見る時、現在の十字架の苦難は重荷とするに足らざるを思はしむ。

吾人か生息する現代活動の時期にありては未來は渺漠にして未だ之れを回想する暇あることなく時々刻々迫り來る責務は極めて急激に且つ極めて强制的なるを以て來生命を思ひ廻らすを須ゐず、今日の務に服するのみにて充分なりと言ふ者あり又思慮なき者の中此れに心服するもあり、去れと少しく思を沈めて觀察する時は現在は來らんとする生命に密接の關係ありて吾人が來世に對して適當なる考察を下すに非れば今日の生命を完全に保

つこと能はざるを悟るに至るべし、天國なるものは吾人を距るまと極めて遠く、來世なるものは遠き彼所にありて現生命と何等關係なしとするか、且つ今ある所の生命は來らんとする生命に依りて支配せらるゝものにあらざるか、吾人如何に日月を送るや、吾人如何に正午、中夜の時を知るや而して吾人は如何にして一日の、時を全然誤りなく知るを得るや。

此れ太陽に依るに非ずや、然るに太陽は地球を距る九千萬哩の遠距離にあり、此れ吾人の想像にだも及はざる長程に非ずや、假りに一時間六十哩の速力を以て休みなしに二百年以上旅行を經續するも此れに到達すること能はざるなり、試みに母体を離るゝと同時に如上の速力にて出發し太陽に向つて二百十年間旅行する生兒ありとせよ尚は終局の目的に及ぼざるまと約一百萬哩なり此く太陽は吾人を距る遠きにあるも尚は吾人は時辰儀を此れに

依りて調整ず、此れ吾人日常の最も普通の事に非ずや、如何なる船舶が星の運行を考察せずして出帆することありや、然り此星や其或ものは五百萬哩の遠距離にありて殆んど思料すること能はず去れど水夫は三千哩の航海をなすに當り其進行を定むるために幾百萬哩の彼方に視線を送らずしては此れを爲さず、而して此の遠き星に依りて其船を指導する時のみ目的の港に達するを得なり、吾人か時計を太陽に依りて調整する如く水夫が星に依りて其船の方向を定むるが如く現代に於ける最も實際的の行動は來世を規準として現生命を送ることに非ずや。

然り吾人が來世に關し眞正なる思想を有するに至りて始めて現世の利益を享有することを得るなり、「來世を輕んずる者は現世に對して罪を犯すなり」吾人心中より來世の觀念を滅却せんか生活の標準は直に低落すべし、故に言へる事あり「明日我死す」との信

條をのみ持する者は早晩、故に食ひ且つ飲むべし」この結論に達するに至るべしと、而して吾人現生涯の利益を最も多く獲得せんと欲せば來世に對して正當なる見解を有せざるべからず。

人生ふ於て來る可き生命程大且つ有用なるものなし、何となれば凡ての他のものは一時的のものなるに此れのみは永遠のものなればなり。

ミヲン殿堂の莊嚴なる弓形門に次の文字あり、一面には「凡て人を喜ばすものは一時的なり」と而して美はしき薔薇の冠冕が此句の上部に鐫刻せらる、次には凡て人を苦むる者は唯一時的なり」と而して其側に十字架の彫刻あり、而るに此堂の正門の頂には「緊要なるものは唯不朽のもののみなり」この句あり、而して「吾人一度び思を彼の永遠なるものに走らせ、此の天來の教訓に依りて生涯を律せんか、現世は極めて喜はしく且つ愈々深遠なる意味を有する

に至るべし。

永遠の生命とは默示の生命なり、夫は此生命は神秘奥妙を以て滿たさるればなり、此不可思議や極めて暗澹として吾人之れを解決する能はずして時に「今我鏡に向ひて見る所朧ろなり」と言はざるべからざることあり、而して若し人生問題の解決せらるゝ事なく、又吾人々類は常に秘密の中に埋沒せられて無情なる失望に遭遇し、且つ到底慰め難き悲哀を味ひ、同時に死に優る試誘を受くる者ならんか、人生は何等の趣味もなく、一朝斯かる不幸にして信仰に光明を得ざる輩に災厄起らんか、言ふ迄もなく立脚地を失ふに至らん、其礎は沈降せんとする砂泥にして、悲哀の極何等の準備なくして永遠に突入するに至るべし、「人生の經驗に熱狂せる者喜んで死の秘密に至らんと飛ぶが如くに急き走る、唯現世を離るゝを得は何處にても何處迄も」。

素より此等生存の秘義は基督の篤信なる弟子に取りても極めて大なる苦痛なるに相違なし、去れど吾人を絶望の淵に沈淪せしむるには至らず、夫は此生命なるものは在らゆる秘義を解決し、未來に於ける不變の信仰は吾人をして終世靜平に爾かも確固たる信賴を得せしむるを知ればなり。

神は現世に於ては凡てを吾人に示し給ふものに非ず、若し凡てを示し給はんか信仰運用の余地なきに至るべし、故に吾人の疑問と渴仰とに對して天父より來る回答は「俟て」と言ふにあるのみ而して來世に於て吾人明かに之を知るを得ん、吾人は苦痛の奉仕が何故に此世に於て爾かく長かりしかを知るを得ん、又吾人は何故に奮鬪の眞中にありて已れ唯一人取り殘されて五里霧中に彷徨せる如く思はれしやの所以を解するに至らん、又何故に過去に於て屢々破れ榮光に滿てる惠深き人格の來りて吾人の途を照し又

直に神に戻り行きしかを知らん、何故に吾人が長く罪惡と爭鬪せるや、何故に時と失敗に陷りしやの理を知らん、何故に神の輝ける天使の臨めるが如く彼の希望は吾人の心中に起り爾かも永遠に吾人をして完全の曙光を望ましめ遂に成就することなかりしやを知るを得ん、而して此啓示は確實のものなるが故に來世を全く光榮あるものとなす、且つ吾人の知らるゝ如く知る事を得べき時の來る迄歡呼して邁進す、而して其時の來る迄靜かに神の裡に休みて、神に凡ての事物を携へ來らんことを信ずべし、吾人の信仰朧ろなる時は、變ることなき愛の聲に耳を傾けよ、又「主」の顏を見る事に依り物として凡て顯はれざるなく凡ての難題は解決せられ、凡ての秘義は一掃せらるべき場所を吾人の爲めに備へんとの約束に耳を傾けよ。

吾人今目の當り上帝に接することせんか、暗黑なる大都會に於け

る難題に就き如何に熱心に神に質すべきぞ、人類をして神の子の像に似せしめんがために人道を向上せしむべき力を吾人に與へ給はん事を如何に切願すべきぞ、又如何に切實に我が靈魂の苦悶を訴へ、我希望と恐怖の意義を示し給はん事を求むべきぞ、去れど夫は無理なる願なり、神は依然「俟てよ」と答へ給ふ、而して來る可き生命に於て此等のものを解明すべしと誓ひ給ふなる可し。

來らんとする默示を完全に期待する事により吾人をして勝利の生涯を送らしむるに足るべき確信は如何に幸ある哉、前述の希望こそ凡てのものゝ失敗する時に於て吾人は安心立命を得しむるに足るものなり、而して吾人は神が凡てのものを明かに示し給ふ可しとの信仰に生活す、吾人は斯かる確信の裡に生存するに依り生命が眞實の意味を顯はすに至る事を覺り得さらんや、重要なる未知元を有する方程式の難問に遭遇せる兒童の如く終脊頭腦

を痛めて目に血走るに至る迄研究を續け就褥の后も安き眠りを得ず、翌日教師の面前に出つるに至りては仔細に不明の因數を指摘せられ、茲に展開せられたる新しき光明に接し再び忠實に解明に從事す、爾かも不成効に終る、吾人々生の長き學校終りを告げ大能の主に進み行く時も斯くの如けん、吾人目の當り主を見る時神は各問題を遺憾なく解明し給はん。

ウエストミンスター寺院のサー、ジャン、フランクリンの爲めに設けられたる紀念碑に佗されたる次の銘を見よ「此碑は其寡婦の建つる所なり、彼は待ち詫びぬ、多くの人を出して捜索しぬ、今や身自から此世を去りて遂に光明の境に彼を捜し出さんとす」嗚呼、長き捜査は遂ふ己れ亦此世を去りて彼岸の生命に入れる時成効すべしとの確信は如何に幸ある哉、而して斯かる啓示が吾人を俟ちつゝあることを知るは我に執りて如何に不朽の喜なるよ。

「今に非ず去れど來るべき時に於ては良き地に於てならん、吾人今日の涙は何の爲めなるかを何時かは彼處にて理會するを得ん。

多くの望を抱ける計畫に光明に非ずして陰雲の蔽ひ掛れるは何故なるかを知るを得ん、始まれるのみの歌の止みしは何の爲ぞ時來らは彼所にて悟るを得ん」。

永遠の生命は亦完き滿足の生命なり、吾人は唯神の溢るゝ愛に浴するを得んか現世に於ても滿足する能はずと言ふに非ず、何となれば神は飢ゑたる靈を飽かしめ給ふ可ければなり、去り乍ら天國は神の子等の終局の目標なり、發達は生命の法則なり、而して此發達は大望を意味す。

吾人の計畫に屬する行路の終點に達する毎に神は一層大にして善良なる理想を與へ給ふ、而して此目標に向つて歩を速むれは

吾人の能力は絶えず展開し、吾人の望は其大さを增すに至り、遂には天國に於ける完き滿足を受くるの準備成りて、「汝の像を取りて醒むる時に滿足すべし」と言ふを得可し。

米國の一婦人嘗てローマの有名なる美術家を訪ひて其工場を隈なく見たり、始めに其作れる當代の型像を示されけるが極めて粗惡なるものなりき、爾かも其當初にありては此れ彼が全力を盡して得たるものなりき、順次案内を受けて後彼れの最近の作に至れるに到抵同一人の手にて成りしものとは認むるを得ざる程の優秀を以て作り成されたり、爾かも此れ多年の研究と熱心なる苦心との結果に外ならず、彼等の凝視せる中に美術家は已れの理想は年と共に發達し、其最近の作の如きは嘗て夢想だもせざるものなりき、今や彼は來らんとする一層高遠なる理想を有する旨を物語れり、「然らば何れの時か滿足せらるゝ事あるにや」との婦人の間

に「然り、天國に於て」とは彼の答なりき、何物にもあれ吾人々類の滿足を得るは唯彼所に於てのみなり、夫は吾人吾理想も天國の外に走ることを得ざればなり。

幸福なる神の都に近かん時、望を失ふべき恐れあることなし、現世に對する吾人の期待は却て往々其の實際に超越する事あり、去れど「目未だ視ず、耳未だ聞かず、人の心に入りし事なきに、神は已れを愛する者の爲めに物を備へ給ふ」。

吾人屢々來世に就き奇なる問を發す、吾人彼所に至らば相互に認知する事を得べきかを訝ることあり、若くして神の國に入れる者は依然幼兒なるべきか將た又既に成人の域に達せるかを疑ふことあり、地上に於て吾人の知れる多くは天の都の住民たるべきやを問はま欲しく思ふこともあり。

去れど目今地上に在りては神が必ずや吾人のために完全圓滿

なる滿足を來すに必要なるものは何物にもあれ來世に於て吾人に備へ給ふ事を知るを以て充分なりとす。

煩勞なる人生の荒浪終りて、完き愛と全き休息とに入る事を誰か願はざらんや激浪海を蹴りたる後、彼の港に碇を下すを望まざる人やはある、爾かも此れに入らんとせば先つ何等かの準備なかるべからず、何となれば驚くべき啓示の句に、水晶の海、眞珠の門、綠玉の城壁、黃金の街との記載はあれど、天國を組成ずるは眞珠にも黃金にも綠玉にも非ればなり、棕櫚の葉は搖りかざされて凱旋を祝し、音樂も亦殿堂に響き渡らんも夫は天國を組成する實質に非ず來世の光榮に入らん者はイエス、キリストに依りて神と和ぐことを得たる者のみなり而して吾人の將來は光明なるか暗黑なるかは各自の決すべき處なり、神其の變らざる慈悲を以て此世に於て百倍を與へ來世に於ては永遠の生命を賜ふ、神が價なしに各人

に與へんとし給ふ賜物を輕ずるは如何に愚なるよ。永遠に之を得る機會を失ふは如何に不利益のことならずや。

嗚呼人よ、神の與ふる此好機を失はず立ちて其手より生命のパンを受けよ、其言ひ盡されぬ又消ゆる失する事なき光榮を得んがために汝の心に備をなせ、生命は事實なり而して天國は其目標なり而して吾人の玆に達する事能はざるは此れ自から樂しき神の目的の實現せらるゝを欲せざるが爲めのみなるを記せよ。

永遠の生命！ 如何なるものぞ？ 不朽なるべき人よ、此れを決するは汝の責任なり、而して吾人は諸子が唯一の選擇をなすを望む若し現世に於てイエス、キリストを選ばんゝ神は其寶座より聲高らゝに「我は汝の爲めに所を備ふ」と宣給ふならん而して吾人若し終迄忠實ならんには、現世の苦艱爭鬪終りを告くる時、神は暗黑なる谿谷を過ぎ峽關や海門を通過して吾人を安然に導き給て永遠

の生命てふ言ふべからざる光榮に出つるを得せしめん。

「日沒して　星出でゝ、
　澄み渡る聲　我に聞ゆ、
一度び　大海に漕ぎ出つるや、
　沙灘の患　有ることなし。

動搖する涙も　眠れるが如く、
　滿潮音もなく　泡沫もなし、
無限の大洋より　寄せ來ると見れば
　忽ちに亦　返り行く。

靜けき夕暮　聞こゆるに初夜の鐘、
　見界もなき暗黑は今來りぬ、

船出せんとする　間一髪、
松良姫の　悲もなし。

時と空間の流れに　超越し、
浴流滔々　我を流し去らんも、
沙灘を出でゝ
我は吾が　響導者に
顔を合はせて遭ひまつらん。

定價金參拾錢

明治四十二年九月　日印刷
明治四十二年九月　日發行

著作者　大立目文彌
發行者　岩崎清潔　仙臺市北五番丁二十一番地
印刷者　佐藤源太郎　仙臺市表小路一番地
印刷所　宮城活版社　仙臺市表小路一番地

發行所　仙臺市表小路　電話二一五　宮城活版社

324
151

324
151

324
151

020943−000−8

324−151

生命

イー・エス・ハローウェー／著

M42
ABI−0795